

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第二号  
平成二十八年三月一日発行（抜刷）

論文

別宮遷宮の歴史について

音  
羽  
悟

# 別宮遷宮の歴史について

音羽悟

## □要 旨

別宮とは正宮（本宮）に対する別け宮であり、正宮につぐ重要なお宮です。古くは天皇陛下の勅書により、後には官符を以て宣下された神社だけが宮号を称しました。『太神宮諸雜事記』によると、天平十九年（七四七）に別宮遷御の記載があり、奈良時代には二十年に一度の式年遷宮が制度化されていたことが理解できます。但し殿舎の規模や社格から判断して、当時遷宮が行われたのは荒祭宮と多賀宮の他、『皇太神宮儀式帳』や『延喜太神宮式』の記載と『倭姫命世記』の御鎮座伝承記事及び中世伊勢神道の記録から大御神の遙宮とほのみやといわれる瀧原宮と伊雑宮でも執り行われたと考察しました。

月讀宮は奈良時代に、伊佐奈岐宮は貞観九年（八六七）に宮号宣下がありました。『延喜太神宮式』によれば、皇太神宮別宮は荒祭宮・伊佐奈岐宮・月讀宮・瀧原宮・瀧原竝宮・伊雑宮の六宮、豊受大神宮別宮は多賀宮の一宮でありました。その後、土宮は大治三年（一二二八）、月夜見宮は承元四年（一二一〇）、風日祈宮と風宮は正応六年（一二九三）の宮号宣下により別宮に昇格しました。

本稿においては、これら別宮の古代から近代に至る歴史の変遷について、殊に遷宮の沿革を中心に典拠史料を明示しながら考察をめぐらせます。

## □キーワード

別宮 遷宮 月讀宮 伊佐奈岐宮 遙宮 瀧原宮 瀧原竝宮  
伊雑宮 佐美長神社 風日祈宮 風宮 重源 土宮 月夜見宮  
高河原神社

## 第一章 月讀四宮の歴史

### 一、別宮遷宮のはじまり

月讀宮以下十二所別宮の遷宮諸祭は平成二十六年十月からはじまり、同二十七年三月を以て斎行されました。平安後期の荒木田氏の家伝書『太神宮諸雜事記』（以下雜事記と表記）によると、天平十九年（七四七）九月十六日に第四回内宮式年遷宮が斎行されましたが、その年の十二月に「諸別宮遷し奉りて、廿年に一度の御遷宮、長例の宣旨おわ了んぬ」との一文があり、このことから別宮についても奈良時代には二十年に一度の式年遷宮が制度化されていたことが理解できます。但し殿舎の規模や社格から判断して、当時遷宮が行われたのは荒祭宮と高宮（多賀宮）は間違いないでしょうが、鎌倉時代中期に度会氏が編集したとされる『倭姫命世記』（以下命世記と表記）の御鎮座伝承記事から大御神の遙宮とほのみやといわれる瀧原

宮と伊雜宮でも執り行われたと私は考えています。

別宮の歴史について、殊に由緒の深い月讀宮・伊佐奈岐宮・瀧原宮・瀧原竝宮・伊雜宮・風日祈宮・土宮・月夜見宮・風宮を中心に拙論を展開致します。

## 二、古代の月讀宮

月讀宮は奈良時代にはまだ「月讀社」と称していました。当宮の創祀については神宮の古文獻にも触れるところがなく不明な点が多く、『続日本紀』神護景雲三年(七六九)二月十六日条の「神服を天下諸社に奉る」の記事において大神宮及び月次社には馬形並びに鞍を奉納する内容がみられます。この月次社を「月次祭に幣帛を奉られる社」の意でとらえる学説もありますが、神宮司庁が編集した『神宮要綱』(昭和三年十一月刊)や阪本広太郎氏の『神宮祭祀概説』(神宮教養叢書第七集・昭和四十年三月刊)、『神宮史年表』(平成十七年三月刊)では月讀社とみなしており、この通説のままでよいと私は判断しています。

正史のうえでは『日本文徳天皇実録』の天安元年(八五七)九月八日条に

伊勢国荒祭、月讀、瀧原、伊雜、高宮等神宮内人五人、始預把笏

とある記事が「宮」の初見と考えられます。ところがこれより早い延暦二十三年(八〇四)に撰述された『皇太神宮儀式帳』(以下儀式帳と表記)に「月讀宮一院」とあります。次に「正殿四区」の記述を確認できます。これについて大西源一氏は『大神宮史要』(昭和三十四年刊)において

茲に注意すべきは、延暦の『儀式帳』に「月讀宮一院、正殿四区」とあるに拘わらず、『雜事記』には、正殿二字となつてゐることであつて、これを『太神宮式』及び『神名式』の「伊佐奈岐宮二座、月讀宮二座」(※後述)に参照し来れば、当時正殿は二区であつたものと見るべく、『儀式帳』の「正殿四区」は、後世の作為であることが考えられるのである。

と解説しており、阪本氏(前掲書籍)や桜井勝之進氏(『伊勢の大神の宮』堀書店、

昭和四十八年三月刊)等先学によれば、東に二殿、西に二殿と並んで建てられていたことが早くから指摘されています。さらにもう一つ解釈に苦しむ点があります。それは文中に見られる玉垣四重「長廻各三十二丈」、瑞垣四重「長廻各二十四丈」の表記で、各玉垣の一边は約二四メートル、各瑞垣の一边は約一八メートルとなり、現行の各御垣より相当大きい構造であつたことになり、平安初期の頃にそれほど広大な境内地を有していたとは通常では考えがたく、この記述の解釈は頗る困難です。神宮考証学の泰斗、御巫清直は瑞垣も玉垣も二重の誤りで、正殿と小殿の二字(東の二殿：月讀命と荒御魂・西の二殿：伊弉諾尊と伊弉冉尊が正殿と小殿との関係でそれぞれセット・後述)を一垣内に収められていたと考察しています。このように通説では、儀式帳の撰述当時の原文は「月讀宮一院、正殿二区」の固定観念があるようですが、清直や大西氏の指摘に倣えば、瑞垣も玉垣も四重ではなく二重となります。それでも玉垣の一边が二四メートルであるから、二重の玉垣を構えようとすれば最低でも一边が五〇メートルの敷地が必要となります。だから管見によれば通説は間違っているのではないかと、もともと一囲いの瑞垣内に月讀尊荒御魂・伊弉諾尊・伊弉冉尊も最も古い時代では一緒に祀っていたのではないかと思案致しております。ただ王朝時代の御垣の実情はどうあれ、儀式帳に「月讀宮」と表記されている訳ですので、少なくとも平安初期には宮号でお呼びしていたことに間違いはないでしょう。

ところで、月讀神の御神威をかしこみ、宝龜三年(七七二)に荒祭神に准じ、毎年九月に幣馬が奉られることとされ、その荒御魂と伊弉諾尊・伊弉冉尊が官社に列せられました。この記述から月讀社が別宮に昇格したのはそれ以前のこと、つまり奈良時代後期ではないかと推測致しております。これとはほぼ同時期に度会郡にあった神宮寺が飯野郡に移されることになったことにも私は注目しています。伊勢神宮寺の創建という画期的な事業に手が付けられたのは、天平神護二年(七六二)のことであり、田中卓氏(『伊勢神宮の創祀と発展』「第五章 伊勢神宮寺の

創建」(国書刊行会・昭和六十年刊)は、その推進者は他ならぬ道鏡であつたと考証されています。『瑞垣』第二一九号(平成二十六年十月刊)で渡邊矩郎氏も指摘されていますが、道鏡の失墜、中臣比登くになりの宮司就任を以て伊勢神宮寺を神郡内より飯高郡度瀬山房へ移すことを決め、次の宮司中臣広成の手により、宝亀七年(七七六)に飯野郡に移し、さらに宝亀十一年には完全に神郡外に追放することに成功したのでした。これと期を一にして月讀神・荒御魂・伊弉諾尊・伊弉冉尊の御神威も増し、官社に列せられたのですが、宮司比登や広成の働きかけがあつたことは否めないでしょう。

月讀宮が特殊の信仰を有して居られたことは、儀式帳の次の一文でも窺えます。

御形、馬乗男神、著紫御衣、金作太刀佩之

と原文に記されており、象徴的に御神像として太刀を佩き乗馬された男神であることを伝えています。なお先の儀式帳及び延長五年(九二七)に成立した『延喜太神宮式』(以下太神宮式と表記)によれば、お宮は大神宮の北三里、すなわち約二kmの地に鎮座されたことを伝承しています。しかし雑事記仁寿三年(八五三)八月二十八日条によれば、大風洪水により月讀宮・伊佐奈岐社等の神宝物及び正殿玉垣御門等を流失したため、九月二十七日に宇治郷十一条廿三布施里、同条廿四川原里之間を新しい適地とされるよう神祇官に言上致しました。そして斉衡二年(八五五)九月二十日に遷宮が斎行されました。それが現在地に相当します。

### 三、古代の伊佐奈岐宮

旧地は現在地の北方、山の手近くの久世戸坂下の二光の森、もしくは今よりもさらに五十鈴川の川岸近くにあつたという二説があり、洪水による殿舎流出を鑑みると、後者の方が説得力がありましょう。しかし儀式帳(旧地)も延喜式(現在地)も同じ「大神宮の北三里」としていますから、旧地も現在地に隣接した所にあつたと考えて間違いないでしょう。さらに度会(西河原)行忠が弘安八年

(二二八五)に撰んだ『伊勢二所太神宮神名秘書』(以下神名秘書と表記)「伊佐奈岐宮二座」の割書に「去太神宮北三里。東月讀宮。西伊佐奈岐宮。各南向座」とあることから、古来殿舎は南向きで今に至っていることが理解できます。

また儀式帳には「鎮祭荒祭月讀瀧原伊雑四宮地用物並行事」及び「所管四宮」の表記・内容がみられます。これにより荒祭宮・月讀宮・瀧原宮・伊雑宮においては、少なくとも平安初期には二十年に一度の遷宮の制度が常習化されていた傍証となります。なお延暦当時「月讀宮一院」内に鎮座する神社であつた伊佐奈岐社は、『日本三代実録』貞観九年(八六七)八月二日条により独立して宮号宣下されたことが分かります。神名秘書の記録に翌十年

遷宮、今度被増作宝殿寸法者也、但伊弉冉社如本、無増作也、今号小殿是也とあり、伊佐奈岐宮の殿舎は増作されましたが、伊佐奈弥社についてはもとの大きさのままでありました。『延喜神名式』(以下神名式と表記)や太神宮式には「伊佐奈岐宮二座」と表記されていますので、全体を伊佐奈岐宮といい、伊弉冉尊は小殿と称したようです。殿舎の規模が小さい処から「おどの」と呼ばれたのでしょうか。「月讀宮一座」もまた同様で、全体を月讀宮と称し、月讀尊荒御魂は小殿と呼んでいました。なお神名秘書によれば、月讀宮と伊佐奈岐宮は第十回内宮遷宮(貞観十年(八六八)の同年に正遷宮が斎行されました。荒木田(井面)忠仲が建久三年(一一九二)に著した『皇太神宮年中行事』の正月旬神拝(二月十一日)の中に月讀宮と伊佐奈岐宮も含まれていました。

貞観に宮号宣下のあつた後、朝廷により延喜式の編集過程において別宮の順位として、伊佐奈岐宮が荒祭宮の次の第二位、すなわち月讀宮の上に列せられていました。しかし巻八の『延喜祝詞式』六月月次祭・九月神嘗祭の祝詞で宮司が神主部・物忌等に申し聞かせる一文に荒祭宮と月讀宮も含まれています。他の宮の記載はなく、この二宮のみが別宮として奉幣された訳です。祝詞式では延喜式の前身である貞観式以前の古い形態が踏襲されていたのか定かではありませんが、



これは月讀宮が荒祭宮に次ぐ格式であることを意味しています。巻四の太神宮式では伊佐奈岐宮の方が月讀宮よりも上位にありますので、延喜式も巻によって内容に齟齬がみられるのです。いずれにしても、この後に至って何時かまたこれが顛倒して今日では月讀宮・月讀荒御魂宮・伊佐奈岐宮・伊佐奈弥宮の順位になっております。

## 第二章 瀧原宮・瀧原竝宮の歴史

### 一、古代の瀧原宮・瀧原竝宮

命世記によると、第十一代垂仁天皇の皇女倭姫命が、御杖代（御使い）として天照坐皇大御神を奉戴して、宮川下流の磯宮をお発ちになり、上流の方に御鎮座の地を求めてお進みになると、砂をも流す急流の瀬があり困っておられたので、真奈胡神がお出迎えをしてお渡し申し上げました。そこで命はそのところに真奈胡神をまつる御瀬社をお定めになったのですが、これが今の皇大神宮摂社多岐原神社です。命はさらに真奈胡神の案内でお進みになると、「大河之瀧原之国」という麗しい土地があったので、この地に宇太の太宇禰奈に指示して荒草を刈り取払わせて宮殿を造立されました。命世記が種本として引用した奈良時代の『太神宮本記』原文には「宮造令坐<sup>支</sup>」と記されていたと考えられ、御巫清直は『太神宮本記帰正証』において「宮トハ瀧原宮、同並宮ノ二宮ヲ謂フ」と述べています。これが瀧原宮と瀧原竝宮の起源といえましょう。儀式帳に「天照大神遙宮」、太神宮式に「大神遙宮」「伊勢と志摩との境の山中、大神宮西を去る九十里」（原漢文・儀式帳では九十二里）と記されています。

『伊勢国風土記逸文』に「瀧原神宮」とあり、国が編纂した『続日本紀』文武天皇二年（六九八）十二月二十九日条の「多氣大神宮を伊勢国度合郡に遷す」（原漢文）という一文をめぐって、瀧原宮が内宮の元宮であると主張する学説があり

ます。長暦二年（一〇三八）の第十九回遷宮に際し、朝廷が神宮に送った金銅飾金物と御装束神宝の調進目録『内宮送官符』にも「瀧原神宮」とありますので、太政官符での神宮号の使用が注目（『伊勢市史』第一巻・古代編・平成二十三年三月刊）されています。ところが「多氣大神宮」は神宮寺または斎宮のいずれかという説（前掲田中氏論文）もあり、元宮説を否定する学者も多数いまして、本稿でのこれ以上の言及は控えることに致します。

しかし瀧原竝宮については、儀式帳と太神宮式には存在が記されていますが、神名式には記載がないため、創祀に関し不明な点が多く種々の解釈がなされています。儀式帳における瀧原竝宮の存在は、書写の過程における追筆と唱える研究者もいます。また前節でも触れましたが、延喜式には同一項目につき巻毎に矛盾した記事が若干例存在します。本例もその一つであります。延喜式はその編纂の着手が延喜五年（九〇五）、奏進は延長五年（九二七）、そしてその施行は康保四年（九六七）であり、虎尾俊哉氏は、この六十余年の間も修正加筆がなされていたことを示唆（『延喜式』集英社・平成十二年五月刊）されています。この指摘を受け、奏進後に竝宮が瀧原宮から分立し、太神宮式には登載されたが、神名式の訂正はされなかったという見方（前掲『伊勢市史古代編』）もあります。このように瀧原竝宮の創祀に関しては今なお不明な点が多いのですが、いずれにしろ平安中期には瀧原宮同様遷宮の制度が定まっていたと思われます。

瀧原宮及び瀧原竝宮とも皇大御神御魂を奉斎しています。これは皇大神宮に皇大御神を奉祀し、同別宮荒祭宮に皇大御神の荒御魂を奉斎する姿の古い形といわれています。江戸後期の内宮禰宜荒木田（中川）経雅は『大神宮儀式解』（以下儀式解と表記）において竝宮について「瀧原宮は本宮の御霊を拝奉るなり。その瀧原宮の御神の荒御魂をまつる歟」と解説し、江戸末期の内宮禰宜荒木田（蘭田）守良は『神宮典略』（以下典略と表記）において「荒祭宮の遙宮の意と云ざる事にもあらんか」と説明した上で、経雅の説に肯定しつつ慎重な姿勢を示しています。

そして阪本広太郎氏も『神宮祭祀概説』（神宮教養叢書第七集・昭和四十年三月刊）で皇大御神の荒御魂であろうと述べておられます。

なお太神宮式によると、古代の神職は、瀧原宮・瀧原竝宮とも内人二人・物忌・物忌父各一人がおり、度会郡の人が任命されていました。これらの神職は、瀧原宮近くに住居せず、多くは宮川下流域に住んでおり、宿直（十五日毎の交代制、のち十日毎）或いは六・十二月の月次祭と九月の神嘗祭に際し当地に赴いていました。これらの三節祭には内宮の禰宜（禰宜一員の平安時代の中頃までは大内人）が参向し、朝廷からの官幣を奉り祭祀を司っていました。二月の祈年祭には、当宮の神職が官幣を奉っていました。

## 二、御船殿

また当宮の北方に「船木」なる地がありますが、『神武天皇記』にみえる「伊勢船木直」、「住吉大社神代記」の船木等本記にみえる「伊西国船木」にいます「伊勢川比古乃命」の伝承と深い関係を有する地と考えられます。『伊勢国風土記逸文』にも、神武天皇朝に天日別命が熊野より伊勢に入り、在地の「伊勢津彦」を追放する伝承がみえますが、これらを併せ考えると鎮座地は、大和朝廷成立史上或いはそれと伊勢地方の関係を伝える諸伝承と密接につながる地域であります。神代記に船木の遠祖・大田田神が造作する船二艘（一艘は木作り、一艘は石作り）を以て、後代の験のために、膽駒山の長屋王の墓に石船を、白木坂の三枝王の墓に木船を置いた記述が見られます。ここに登載される船は、航海する乗り物の船のことではなく、棺を指しているのでしょう。このことから船木氏は木棺、石棺の製作にも携わった氏族であったと思料致します。

宮地の殿舎のうち特に注目されるのは「御船殿」の存在です。儀式帳に「御船殿一宇、長一丈五尺、弘四尺、高六尺」とあり、正徳六年の記には「桁行一丈六尺」と伝わっています。守良は典略において「古へより此宮の御船代を納る御殿

なるべし」と述べています。御船代は御形（正体・御霊代）を覆う御樋代を納める大型の容器ですが、御船殿は現行、正宮はじめ他の別宮及び摂末社に存在しません。内宮の御船代は古くは禰宜館中の御倉である高倉殿に納められていたようです。しかし荒木田（藤波）氏経が著した『寛正三年造内宮記』によると、寛正三年（二四六二）の第四十回内宮遷宮の頃には退転していました。その後正遷宮が中絶し、天正十三年（一五八五）に百二十四年ぶりに第四十一回遷宮が再興されると、荒木田二門の氏寺田宮寺に建てられた御船殿に送られることとなり、次の慶長十四年（一六〇九）の第四十二回遷宮もこれに倣い、以後近世は田宮寺の御船殿に御船代を奉納するのが慣例となりました。瀧原の地でのお宮の信仰と規模で言えば、正宮並の御船殿が存在しても不思議ではありませんが、何故今日瀧原宮にだけ建物が伝わったのでしょうか。

このように御船殿は御船代を納める倉と通常は考えられますし、守良が言及しているように近世の神宮祠官もそれを支持してきましたが、先に紹介した「船木」の地名に由来するのではないかという全く異なる見解もあります。瀧原宮の下流約六キロ、大紀町三瀬川の地、宮川に臨む断崖の上に多岐原神社が鎮座します。近年まではここに熊野街道・宮川渡河の「三瀬の渡し」がありました。つまり「御船殿」は古代以来の宮川の水上交通を象徴するものという説であります。木棺の製作を生業とした船木氏が御船代を造作するのは至極当然のことであつたかもしれません。まだ調査の段階で解明には至りませんが、船木氏の存在とも関連させて突き詰めれば興味深いものがあります。現在は切妻造板葺一宇の御船倉が二十一年に一度の式年遷宮で他の殿舎と一緒に造営されています。

## 三、遷宮齋行の初出

記録の上で別宮の遷宮の表記が認められるのは、先程紹介した内宮第九回に相当する斉衡二年（八五五）で、月讀宮と伊佐奈岐宮の遷宮が社地替えによって行

われました。続く内宮第十回の遷宮は九月十六日に齋行されましたが、行忠の『神名秘書』により、その年に月讀宮と伊佐奈岐宮の遷御があったことが確認できます。その後、別宮の遷宮については文献上百数十年記載は見られず、『中右記』より嘉保二年(一〇九五・内宮第二十二回)内宮五別宮の遷宮が執り行われたということが分かります。この場合の五別宮とは、荒祭宮・月讀宮・瀧原宮・伊雜宮の四別宮を指すと思料され、もう一宮は瀧原竝宮か伊佐奈岐宮か不明です。

その次の記録は『建久元年内宮遷宮記』で、建久元年(一一九〇・内宮第二十七回)十二月に荒祭宮・月讀宮・瀧原宮・瀧原竝宮の四別宮の遷御が齋行されました。この時、意外にも「荒祭宮」の文字が文献上はじめて認められるのでありますが、これ以前の古史料に記載がないのは、正宮にあわせて通常に正遷宮が執り行われていたからであって、ことさらに記録に留める必要性がなかったからでありましょう。

#### 四、中世の遷宮

中世以降の記録に最初に登場するのは外宮の別宮で、『類聚大補任』によると、第二十八回に当たる建暦元年(一二二二)十二月十八日に月夜見宮が齋行されています。また内宮も第二十九回に当たる安貞二年(一二二八)には荒祭宮が九月十七日、月讀宮と伊佐奈岐宮が十二月十九日、瀧原宮と瀧原竝宮が十二月二十三日、伊雜宮が翌二十四日に執り行われています。以後荒祭宮と伊雜宮は鎌倉時代の史料にいくつかみられるようになります。また多賀宮は天授六年(一一三八〇)第三十六回外宮遷御の儀が行われた二月八日の翌日に齋行されたのですが、これが初見記事(『康暦二年外宮遷宮記』)です。

正応六年(一二九三)三月二十日に太政官符が下され、異国降伏の賞として両宮風社に宮号が宣下されましたが、風日祈宮は『皇代記付年代記』によれば、明德四年(一三九三・内宮第三十七回に相当)九月二十三日に遷御を確認できます。

土宮については、応永三十年(一四二三・外宮第三十八回)十二月十八日に執り行われました(『外宮応永記』)。

#### 五、式年造替の制の復興

荒祭宮の式年造替は中世後期以降退転中絶しましたが、慶長十五年(一六一〇)仮殿遷宮、寛永八年(一六三二)に至って式年造替の制に復しました。また多賀宮は南北朝以降式年造替は行われなかったのですが、応仁以降高向源右衛門が私力を尽くして仮殿の造進に寄与し、延徳二年(一四九〇)、閏八月二十二日に竣功、九月十七日には仮殿遷宮が行われました。またその五日後には土宮の仮殿遷宮も齋行されました。以後、多賀宮は大永元年(一二二二)には今川氏親、天文十七年(一五四八)には松木備彦<sup>ともひこ</sup>、天正六年(一五七八)には安井将監、同十九年浅野長吉等篤志家の寄進により殿堂の損傷を修繕しながら仮殿遷宮を行ってきました。そして徳川幕府に至って寛永八年(一六三二)に正遷宮が齋行され、式年造替の制が漸く復旧しました。土宮についても同様で、天文十五年(一五四六)及び天正五年(一五七七)には近江の磯野丹波守員正、天正二十年には備中の篤志家の寄進によって仮殿で凌ぎ、寛永八年に正遷宮が復興されました。

瀧原宮においては、鎌倉時代初期には宮地周辺は神宮の管領を離れ、神宮使も容易に入れず守護領となりました。さらに南北朝時代や室町時代になると、北畠配下の武士などの神領横領や妨害で祭使参向はなくなり、藤波氏<sup>うづね</sup>経の尽瘁で執り行われた内宮第四十回遷宮と同年に齋行された寛正三年(一四六二)の正遷宮以降式年は中絶しました。しかし慶長十年(一六〇五)に江戸幕府の手により大板葺で正殿が造営され、寛文二年(一六六二)には萱葺屋根に復旧しました。また祭使の参向が正保三年(一六四六)に復興されました。



## 六、近世の遷宮

近世になると、遷御以外の別宮遷宮諸祭の日時を告示した史料が散見します。慶長十四年（一六〇九）の両宮第四十二回遷宮の翌年、『宮司引付』等に各別宮の木造始祭の日時宣下の記載があります。江戸時代に入ると遷宮記や長官日記などにより史料の内容もさらに充実してみられます。両宮第四十四回の時の慶安三年（一六五〇）には遷御の他、洗清や川原大祓の記録も認められます。次の第四十五回では寛文八年（一六六八）に各別宮において鎮地祭・立柱祭・上棟祭などが執り行われています。そして第四十六回の時の元禄三年（一六九〇）では、御戸祭と御船代奉納式の記述も確認できます。

特筆すべき記事は、享保十二年（一七二七）二月十五日山田奉行保科正純より、宝永六年（一七〇九）の第四十七回遷宮の残材を以て瀧原宮・瀧原竝宮・伊雑宮の御用材に充てたということです。瀧原宮と瀧原竝宮及び伊雑宮は、貞享五年（一六八八）以降、江戸期においては両正宮の前年に斎行されました。在地（瀧原宮は野後、伊雑宮は磯部）の神人等の勢力が強く、祭祀をはじめお宮の運営をめぐって神宮側との争論が絶えず、私宮の風潮を世に知らしめていた一例と考えられます。

## 七、若宮神社

瀧原宮の境内には、所管社若宮神社が鎮座しています。去る平成二十六年十一月八日、当社も遷御の儀が斎行されました。

当社の成立年代は未詳ですが、井面忠仲が建久三年（一一九二）に著した『皇太神宮年中行事』正月十一日句神拝事に「若宮」の名が初見します。一部の学説では寛正五年（一四六四）に長官（一禰宜）であった藤波氏経が補訂した箇所との指摘もありますが、神宮文庫所蔵の写本の諸本と校合したところ、忠仲の頃の記事と判断して差し支えないかと思われます。遑って、少なくとも平安時代の後期にはおまつりされていたといえましょう。

御祭神についても古来詳らかではありませんが、同書の氏経による寛正の加筆とされる六月条に「天若宮」と表記されており、古老の言い伝えでは「天水分神」との説があります。これは瀧原二宮を速秋津日子・速秋津日売二神とする一説に基づいています。当地には宮川水系中流域の大内山川の支流頓登川が境内南に流れていますが、この二神の御子神である天水分神をまつるという思想がいつともなく生じたのでしょうか。中川経雅は儀式解において、その点を示唆していますが、守良は典略で否定しています。

社殿は古くから瀧原宮の東に南面して建てられていたと思われます。

（註）中臣氏の祖大鹿島命の孫天見通命を祖先とする荒木田氏は最上の十一世の孫石敷より、一門佐禰磨、二門田長の二派に分かれた。正員禰宜になる家を重代家または神宮家と称した。神宮家は一門で蘭田、井面、沢田、二門で世木、納米、藤波、中川、佐八などがあつた。

## 第三章 伊雑宮の歴史

### 一、古代の伊雑宮 ― 社名の由来 ―

命世記によれば、垂仁天皇の御代、皇大神宮（内宮）御鎮座の後、倭姫命が内宮の供御の御贄地を定めようとして志摩国を巡行されたことがもとで、伊佐波登美之神がこの地に豊かな稲を奉り神殿を造営したと伝えます。『古事記』に「島の速贄」（志摩から朝廷に納められる初物の海産物）と記され、『万葉集』巻六に「御食つ国、志摩の海人ならし、真熊野の小船に乗りて、沖辺漕ぐ見む（一〇三三）」とも歌われている（聖武天皇が天平十二年（七四〇）十月に藤原広嗣の乱を避けて伊勢に行幸の際、供奉の列に加わった大伴家持が詠んだ歌）ように、志摩国は風向麗しく海産物に富み、古来朝廷と神宮の御料を貢進した地です。



当宮が文献の上に初めて現れるのは、神亀六年(七二九)の『志摩国輸庸帳』(正倉院文書)で、それには伊勢大神宮の神戸のほか、粟嶋神戸課丁五人、伊雑神戸課丁六人の庸(塩)が輸されています。また『新抄格勅符抄』の大同元年(八〇六)牒には、「粟嶋神二戸」、「伊雑神二戸」とみえています。従って神亀以前から、志摩国に伊雑・粟嶋二神がそれぞれ個別に存在したとみられますが、伊雑神は内宮の別宮として儀式帳に「伊雑宮一院、(中略)称太神遙宮、御形鏡坐」とあり、太神宮式にも「伊雑宮一座、太神遙宮」とあるから、少なくとも延暦以前から天照大神の御魂をお祭りする大神宮所管の別宮として位置付けられていました。

ところが神名式に伊雑宮の名は見えず、志摩国式内大社として登載されるのは「粟嶋坐伊射波神社二座」であります。そのため伊雑宮を式内社伊射波神社と考えるか否かについて説が分かれています。現在、鳥羽市安楽島町の伊射波神社を式内社に比定する学説もあります。これは先の大同元年牒の記事より粟嶋神と伊雑神は別神であり、粟嶋神こそ伊射波神社の起源であり、粟嶋は志摩国の特定地、安楽島を表すとする説です。『二宮巡拝記』を纏めた江戸前期の神道家橘三喜をはじめ、中川経雅、蘭田守良等近世の一部の神宮祠官(神職)はこの説を主張しています。儀式帳に度会郡内の所管として荒前神社の名前がみられますので、平安初期には二見にお祭りされていたことが分かります。また同帳には御祭神を国生神の御子・荒前比売命としています。現在荒前神社は二見町松下の神前神社(こうざき)に御同座されていますが、経雅は儀式解において

荒前は阿良佐岐とよむべし。当社は志摩国答志郡安楽嶋の崎なる加夫良古明神なるべし

と述べたうえで

当社坐す村を安楽嶋といふも、もとは荒前村なるべし。好字を用て荒を安楽とし、崎を嶋と転ぜし

と考証しています。

また守良も典略において

さて此船神は伊射波神に祈るをもて俗に加布良胡と申し、本名は埋れたるなるべし。今も粟嶋に坐すと云、志摩国一宮といへば余神にあらざるべし。

と解説しています。近世の神宮祠官は荒前神社の御祭神荒前比売命は安楽島の伊射波神社に加布良胡明神として祭られているということ、そして伊射波神社は志摩国一の宮と言及しています。太古は不詳ですが、少なくとも江戸時代には荒前神社は、安楽島の伊射波神社内に祭られていたと考えられます。なお守良の説によれば、加布良胡とは、新装の小船を海に揺らしながら浮かべるときに唱える文言のようで、建久三年(一一九二)に荒木田(井面)忠仲が著した『皇太神宮年中行事』に既に表記されているので、平安後期以前には加布良胡明神としてお祭りされていたのでしょう。しかし近代以降、荒前神社は儀式帳撰述の延暦当時の度会郡内の所管社として意義づけられ、二見の神前神社に合祀されましたが、地元では伊射波神社は現在も加夫良古明神とも呼ばれています。

一方粟嶋については、志摩という地名自体も粟嶋に由来するとして、志摩国全域を指すとする説もあります。御巫清直をはじめ古来神宮関係者と多くの学者はこの説を支持しています。殊に清直は『二宮管社沿革考』において経雅の説を否定しています。

雑事記宝亀四年(七七三)十月十三日条に志摩守目代三河介伴良雄と書生惣判官代酒見文正が伊雑神戸の検田の為、伊雑宮近辺の猪鹿を射る事件が起こりました。この時宮人(社人)が制止を促しますが承諾せず事を起こしたので、内人(禰宜の下の子)等が本宮に訴え、さらに宮司に上申して宮司の解文(下位の者が上位に提出する公文書)により朝廷は離宮院において良雄を大祓に科しました。また延長五年(九二七)九月条に「伊雑宮の御祭料、志摩国例進の幣帛並びに御調種々の御贄等、例に依りて調備せしめんが為に」(原漢文)と見えるように、古くから志摩国司が本宮の祭祀に関与していることが分かります。同一の社が異

なった名称で呼ばれるのは、神宮と国司とに両属する特殊な由緒を持っていたからでありましょう。神宮から提出した儀式帳及びそれをもとに作成されたとみられる太神宮式と、国司の申告による神祇官の官社帳をもとに作られた神名式とは、表現上の相違がありうるという立場でいえば、伊雑は「イサハ（伊射波）」と訓めること、神宮では早くから別宮として位置付け「伊雑宮」と称し一座の神を祭っていたが、国司や神祇官では他社と同様に「伊射波神社」と呼び、二座の神を祭っていたと考えられるからです。

阪本広太郎氏は『神宮祭祀概説』（神宮教養叢書第七集・神宮司庁・昭和四十年三月刊）において、延喜以降、国司の祭祀が途絶えて神宮に専属するようになり、一方の名称が全く焼失して専ら伊雑宮、伊雑神戸の名で呼ばれるようになったことを示唆されており、私もその説は妥当と判断しています。

## 二、古代の伊雑宮 2 — 御祭神 —

志摩国は奈良時代以前から海洋部族として有名な磯部氏族の根拠地（伊雑「いざは」の地名も恐らくは磯部「いそべ」の転訛でありましょう）であったことを史料すれば、粟嶋神も磯部氏が信仰した神でありました。往古この地方に粟嶋神が鎮座されていたのですが、後にこの地が大神宮の神戸として発達するに及んで、さらにこの社に天照大神の御霊を鎮祭することになり、これを特に当時の地名によって伊雑神と呼んだのではないかと阪本氏は指摘されています。この伊雑神が天照坐皇大御神御魂であります。

このようにこの両神は早く神亀以前において、少なくとも奈良時代の前期には朝廷より神領を寄進される程の地方の名社となったのでしょう。ではいつ頃より神宮も祭祀の対象として祭るようになったのでしょうか。儀式帳の記載より、記録の上では延暦以前、つまり平安時代草創期以前とまでは確証できませんが、冒頭でも触れました雑事記によると、天平十九年（七四七）九月十六日に第四回内宮

式年遷宮が斎行され、その年の十二月に「諸別宮遷し奉りて、廿年に一度の御遷宮、長例の宣旨了んぬ」（原漢文）との一文があり、このことから別宮についても奈良時代には二十年に一度の式年遷宮が制度化されていたことが理解できます。当時遷宮が行われたのは荒祭宮と高宮（多賀宮）の他、命世記の御鎮座伝承記事から内宮の遙宮といわれる瀧原宮と伊雑宮でも執り行われたと私は考えています。雑事記に、白雉二年（六五二）九月、洪水の難により瀧原宮・伊雑宮の御祭は便宜の所での遙祀となり、官幣は後日に進納された記事が見られます。中川経雅は伊雑宮の創祀につき『大神宮儀式解』において

当宮祭り定しは、世記に景行天皇御世と見ゆ。いかなるにや。雑事記、宝龜二年条、白雉二年九月、伊雑宮の神事大水によりて不参向と見むれば、白雉より前なることは著し

と言及し、守良も同意見を主張しています。この雑事記は辻善之助氏のように鎌倉初期の編纂にかかるとみる学説もありますが、阪本氏や田中卓氏（『式年遷宮の起源』『遷宮論集』・神社本庁・平成七年三月刊）により宣旨・格・官符等信用せらるべき史料を引用してある処から、古記文の大体は真面目なる記録として取り扱われることが紹介されています。従ってこの白雉二年の古記録は信用してよいものと私は判断し、経雅が指摘するように伊雑宮の創祀は大和時代にまで遡っても差し支えないのではと思案致します。

このように神名式に「粟嶋坐伊射波神社二座」とあるように本社二座の神は志摩国司の祭祀にも与っていたのですが、後には粟嶋神が主神の位置から下って相殿神となり、遂にはその由緒も全く忘れられてしまったと阪本氏は指摘されています。

また『倭姫命世記』『伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記』『神名秘書』等、中世の豊受大神宮（外宮）祠官の神道書によれば、相殿神を天日別命ノ兒、玉柱屋姫命（度会氏の祖神天柱屋姫命）としています。これについて江戸後期の内宮禰宜荒木田（蘭

田)守良は『神宮典略』において「度会氏はかにかくに己が祖を尊きものにせんと巧に謀る中にも、此はいと恐き説也」と述べ、否定しています。

### 三、中世の伊雜宮1 ―東大寺再建をめぐって―

鎌倉時代の編集『吾妻鏡』によれば、治承五年(一一八二)一月十九日に熊野山の僧都湛増一味が源氏の蜂起に動揺して伊雜宮に濫入し、伊雜宮の殿舎を破壊し神宝を略奪しようと企てました。このとき内宮長官(一禰宣)荒木田成長はいち早く御神体を内宮正宮に臨時奉遷致しました。この少し前の十二月(治承四年)に平重衡が南都の興福寺や東大寺を焼き討ちする事件が発生しておりました。この背景には源平両氏の争いと熊野・伊勢との信仰上の対立があつたと思われます。

この長官成長は、鎌倉草創期に僧慶俊が筆録した『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』によれば、文治二年(一一八六)四月に後白河法皇の院宣を奉じて東大寺衆徒六〇人が参宮した際、内宮において過分な馳走を振る舞い、大歓待をした人物です。同記によれば、二月中旬、東大寺大仏殿の再建事業を祈念するため伊勢に参詣していた高僧重源に天照大神の夢告があり、それに従って東大寺僧が『大般若經』を書写し、四月に外宮、内宮に参詣、供養・転読を行ったというものであります。東大寺僧による集団参詣は計三度行われ、南都(奈良のお寺)において伊勢の神宮信仰が浮上する契機として重視されています。

同記によれば、東大寺僧は文治二年四月二十五日に成覚寺に宿泊、翌二十六日に外宮祠官の度会氏の氏寺、常明寺に移動し、大般若經供養と論議を行い、この夜に外宮に参詣しました。そして二十七日に内宮に参詣し、内宮長官荒木田成長の創建した天覚寺に宿泊、二十九日に大般若經供養と論議を行いました。外宮では、供養当日になって長官度会光忠から度会氏の氏寺常明寺に移動するように伝えられ、また参詣も夜蔭に紛れ、少々参詣できただけでありましたが、内宮では長官成長が自ら一行を迎え、僧らが一の鳥居で憚っていたところ、成長は中へ引

き入れ参拝させています。また外宮での食事が、祭主大中臣能隆が京から送ってきた<sup>ちまき</sup>炊飯(饗膳)五具を分配していたのに対し、内宮では「美膳六十前」が振る舞われたのでした。

何故神宮はこの参詣を受け容れたか、殊に内宮では何故手厚い待遇をしたのでしょうか。当時は天照大神と大日如来たる大仏との習合思想が唱えられた時代であり、日本仏教の中心とされる東大寺との結びつきを説く学説もありますが、源氏との関係を指摘した説(斎木涼子氏「東大寺層の伊勢神宮参詣と中世的神仏習合」(『特別展図録「頼朝と重源―東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆―」・奈良国立博物館・平成二十四年七月刊)が注目に値します。平氏によつて焼き討ちされた南都が源氏の手厚い保護を受けましたが、南都と関係を持つことで源氏との橋渡しとなり源頼朝との絆が深まり、神領の寄進に期待したからかもしれません。

### 四、中世の伊雜宮2 ―神宮と頼朝―

神宮は鎌倉に幕府を置く源頼朝から多大な寄進を受けたことは早くから知られていますが、頼朝が伊豆で挙兵した当初から神宮と関係を持っていたことが考えられます。また外宮の度会生倫が鎌倉に滞在するなど(『吾妻鏡』養和元年(一一八二)十月二十日条等)、神宮内部には平氏の眼を恐れながらも密かに頼朝を支援し、東国の神領を確保しようという勢力があつたことが主張されています(上横手雅敬氏「頼朝の宗教政策」(『権力と仏教の中世史―文化と政治的状况―』法蔵館・平成二十一年)。

『吾妻鏡』によれば、頼朝は武蔵国大河土御厨を外宮に、同飯倉御厨を内宮に寄進するなど、將軍の篤い崇敬心が見て取れます。なお同書文治三年(一一八七)一月二十日条によると、頼朝は弟義経追捕の祈願を大神宮にし、奉納品のうち神馬一疋を伊雜宮に贈っています。この頃より新たに開発された御厨・御園等の神領を他勢力の狼藉侵犯から守る必要が生じ、伊雜御浦惣檢校職が置かれて、これ



に的矢氏が補され、伊雜宮の神事・公事にも預かるようになりました。しかし室町時代以降、的矢氏の勢力も衰え、神宮の威力は衰微し、神領も九鬼氏に横領され、正宮に準じて行われてきた式年遷宮も中絶し、恒例の祭典に禰宜が参向することも絶えがちになり、伊雜宮も磯部七郷の郷民の手によって、慶長六年（一六〇一）寛永十五年（一六三八）の仮殿遷宮が行われました。

なお式年遷宮斎行期日に関していえば、意外にも古い時代の記録はなく、安貞二年（一二二八）九月十六日に内宮第二十九回遷宮が執り行われたその年の十二月二十四日に伊雜宮で斎行されたのですが、これが初見記事（『安貞二年内宮遷宮記』）となっています。また『嘉元三年伊雜宮遷宮記』によると、文永三年（一二六六）九月十六日の内宮第三十一回遷宮の前年三月十九日に斎行されていることが分かります。さらに同記によれば、嘉元二年（一二〇四）十二月二十二日斎行の内宮第三十三回遷宮の翌年一月二十三日に、『元亨三年伊雜宮遷宮記』によれば、元亨三年（一二三三）九月十六日斎行の内宮第三十四回遷宮の同年十二月二十四日に執り行われたことが理解できます。

## 五、近世の伊雜宮 1 ―磯部の神人―

伊雜宮にも御師の存在が知られていますが、旧禰宜家『瀬川文書』によれば、遷宮費調達のため磯部の杜人（神人）たちが諸国を回り、初穂料を募ったのが始まりと伝えられており、明応（一四九二～一五〇一）から慶長（一五九六～一六一五）にかけ檀那をもつに至りました。しかし伊雜宮の経営は苦しく、神人たちは神領を再興するため鳥羽藩主九鬼・内藤氏からの返還を求めるべくしばしば上訴に及びましたが、殆ど黙殺されました。そこで磯部の神人は内宮禰宜に対抗し寛永十年（一六三三）以来神訴を繰り返し、伊雜宮を尊貴な神社と宣伝、神格を高めることにより上訴を有利に導こうとして、「伊雜皇大神宮」と称し、内宮・外宮と同格で伊勢三宮説を唱え、中でも伊雜宮こそ天照大神を祭る日本最初の宮で、内

外両宮は伊雜宮の分家であると主張するようになります。『日本書紀』垂仁天皇二十五年条にある

大神の教の随に、其の祠を伊勢国に立てたまふ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ（原漢文）

の磯宮であり、『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』にある「從伊勢国飯野高宮、遷幸于伊蘓宮」、「倭姫命世記」の「從飯野高宮、遷幸于伊蘓宮」の伊蘓宮であり、内宮の鎮座以前であると力説し、内宮ははるかに川下にあると難癖をつけてきたのでした。その根拠は明暦四年（一六五八）に著された『伊雜宮旧記』や『旧辞大成経』に示されますが、いずれも新たに作成された書物でありました。同年十一月二日の朝廷からの綸旨・裁決によって伊雜宮は内宮の別宮で祭神も伊射波富美命と定められましたが、磯部の神人はこれを不満としていました。江戸中期に外宮権禰宜喜早清在が採録した『毎事問』によれば、寛文二年（一六六二）九月二十六日、伊雜宮式年遷宮の旧例と伊雜宮神人の謀逆を調べるために、朝廷は大宮司大中臣（河辺）精長と内宮三禰宜中川経盛、五禰宜藺田守清をはじめ、井面・藤波の神宮家、さらに浦田織部長次、山本采女末慶以下宇治会合年寄等を京都に召喚し、精長等は十月九日に京都に発足し、十一月二日に綸旨を以てご沙汰を賜り、禰宜と共に同月十日に帰還しました。しかし磯部の神人はこれに屈せず大挙して江戸に入り、寺社奉行井上河内守に訴えましたが、退けられたため、ついに四月、將軍家綱の日光社参の途上直訴しました。しかし当然受け入れられる訳がなく、翌三年六月二十二日、主立った神人四七人が伊勢志摩両国から追放になり、天和三年（一六八三）『旧辞大成経』の破却と関係者の流刑・追放が命じられ、約五〇年に亘った騒動に終止符が打たれました。

## 六、近世の伊雜宮 2 ―造替遷宮―

神人等によって行われてきた造替遷宮も、神宮の古儀復興を精力的に進めた大



宮司精長の<sup>じんすい</sup>尽瘁もあり、寛文三年に先例に復しました。その伊雜宮の造替・宮人補任の争論に関する経緯は『大宮司精長引付』(増補大神宮叢書22『二宮叢典後篇』吉川弘文館・平成二十六年九月刊)に所収されていますが、当時古儀の詮議は充分でなく、神人等による私宮の余風を因襲して他の別宮と異なるところがありました。神宮文庫に伝わる享保十三年(一七二八)・寛延元年(一七四八)・明和五年(一七六八)・天明八年(一七八八)・文化五年(一八〇八)・文政十一年(一八二八)・嘉永元年(一八四八)・明治元年(一八六八)の『伊雜宮御飾金物絵図帳』によれば(※いずれの遷宮も両正宮の前年に遷御の儀を斎行)、正殿に高欄が張り巡らされ、内外両正宮に匹敵するほどの金銅飾金物が奉飾されていたことが分かります。しかし明治四十二年(一九〇九)度遷宮から金銅飾金物を鉄金物に改められ、造替年期も明治二十二年(一八八九)度より一年遅らせ本宮と同年に執行され、昭和四年(一九二九)度の第五十八回遷宮に及びました。そして戦後、昭和二十八年(一九五三)の第五十九回遷宮により両宮の一年後に斎行され、今日に至っております。

儀式帳に「志摩国答志郡伊雜村に在り、大神宮南を以て相ひ去る八十三里」、太神宮式には「大神遙宮、志摩国答志郡に在り、大神宮南を去る八十三里」とあり、瀧原宮については太神宮式に「伊勢と志摩との境の山中、大神宮西を去る九十里」(いずれも原漢文・儀式帳では九十二里)と記されていますので、距離にして瀧原宮と伊雜宮は同じくらい大神宮から離れた遙宮でありました。現在、宇治から島路川沿いの逢坂峠を越える伊勢道路の短絡路を通れば、瀧原宮に比べ、伊雜宮は半分くらいの距離の近いイメージがありますが、内宮からの交通は、古く今日の鳥羽街道の迂回路線をとっていたと考えられます。『新任辨官抄』によれば、内宮より徒歩半日の距離であったことが分かります。守良も典略において

鳥羽の地より加茂吾知(五知)村に出、是より磯部村に至る道ありと述べています。

## 七、佐美長神社1 ― 御鎮座の由来 ―

伊雜宮の南約八百メートルの地に鎮座し、大歳社または穂落社とも称えられます。命世記によると、命が志摩国を巡行され、やがて鳥の鳴く声高く聞こえて夜昼止まないの、不思議なことだと思ひになり、大幡主命と舍人紀麻呂良に見に行かせると、葦原の中に一株の稲が生えており、根本は一本で穂が千穂にも分かれて茂っていました。一羽の真名鶴がその穂を啜えて飛びながら鳴いているのを発見し、この鶴を大歳神(五穀の神)と崇めて、この地にお祭りしたと言います。土地の人々は今も地主の神と崇め、地鎮・方除等の信仰があります。なお同社の御前に小祠四社の佐美長御前神社がお祭りされています。

なお真名鶴は古くは食用とされた記録もあり、松木時彦氏の『神都百物語』によれば、江戸幕府において将軍が狩猟した鶴を毎年八月下旬に朝廷へ献上していたようで、真名鶴は將軍以外の何人も猟は厳禁されており、此を犯した者は処罰されたといひます。そうはいっても公然とした狩猟や飼養の禁令が出されていたわけではなく、妄りに制裁を加えることも困難であつたらしく、各国郡の統治者の悩みの種で鶴殿敬遠主義をとっていました。それゆえ真名鶴は稀少価値の鳥とはいえず、田畑でも見られる身近な鳥であつたのかもしれませんが。

さて儀式帳には「佐美長神社」とあり、これが史料上の初見です。但し神宮文庫所蔵一門七一九号他、儀式帳の写本中には「佐美良神社」と記すものがあり、中川経雅の『大神宮儀式解』や藺田守良の『神宮典略』では「佐美良神社」をとっています。その後の史料では、『伊雜宮遷宮記』所引の康永三年(一三四四)六月二十四日「伊雜宮御遷宮御装束御神宝等事」に儀式帳とほぼ同文の記事がみられます。この康永三年の記事には、儀式帳の年中行事月行事と同じ「佐美長神社」とみえています。しかし儀式帳の記載は、伊雜宮記事の後に遷宮とは全く関係のない当社を記しているため、一部の学説では、延暦二十三年(八〇四)当時の記述ではなく、その後の追記とみなしています。もし後世の加筆であるとすれば、

康永以前の追記ということになりますが、真偽の程は定かではありません。また守良も『神宮典略』で太神宮式や建久元年（一一九〇）の第二十七回遷宮の記録『建久元年内宮遷宮記』他遷宮記に社名が見られないので、社名、地名、祭神名のいずれも不明としています。

現存する殆どの史料では「大歳神社」とあり、明治四年（一八七二）に旧称の「佐美長神社」に復されるまで、大歳神社と称されてきました。また近世には大歳宮と宮号を以て呼ばれ、穂落社（宮）とも別称されていました。

大歳神は、命世記に「彼の鶴の真の鳥を号づけて大歳神と称す。同処に祝い宛て奉る也」とあるもので、『安貞二年内宮遷宮記』に「次に坤の方に向いて大歳御社を神拝し畢る」とあるのが、年紀をもつ現存史料の初見です。ただし命世記では、伊雑宮と同じ場所で祭ったとあるのに対して、『安貞二年遷宮記』では坤（南西）の方に向かって神拝（遙拝）したと、つまり方角的に現在地に比定できる場所を示唆しています。同遷宮記は安貞二年（一二二八）当時の八禰宜であった満忠神主が作成した信憑性の高い記録ですので、少なくとも中世の頃には大歳神社は現在地に鎮座していたといえましょう。

## 八、佐美長神社2 ―大歳神社―

建久三年（一一九二）に荒木田（井面）忠仲が編集した『皇太神宮年中行事』の正月十一日の旬神拝の条に「大歳御前」とあり、また六月二十五日の伊雑宮祭の条に「次又大歳拝」さらに翌二十六日早旦に「大歳御前に参神拝」とあります。しかし同年中行事は寛正五年（一四六四）に荒木田（藤波）氏経が加筆した室町中期の行事が全体の所々に挿入されており、鎌倉初期の行事と室町中期の行事とを文章の中から識別するのは極めて困難なことです。守良は鎌倉時代編集の『神宮雜例集』などに「大歳」の記録がみられないことから、いずれも建久当時のものでなく、寛正の頃の行事であると指摘しています。慥かに六月の二つの記事は氏

経の改補によるものでしょうが、神宮文庫に伝わる写本を校合したところ、書誌学的観点から正月十一日の旬神拝の記事は忠仲の当初の記録ではないか、つまり鎌倉初期には「大歳神社」の社名が使用されていたのではないかと私は考えます。

また当社は神名式の志摩国答志郡条にみえる「同じき嶋に坐す神乎多乃御子神社」に相当するとする説があります。現在佐美長神社の北側に小字「小田」があり、社名中の「乎多」に相應することから、この説は説得力がありましょう。恐らく、志摩国側では同嶋坐神乎多乃御子神社と呼び、内宮側では佐美長神社、地元神人たちは命世記の伝承に従い大歳神社と称したのでありましょう。『磯部町史』によると、儀式帳が大歳神社と記さず、佐美長神社と記したことは、儀式帳内に別に大歳神社（小朝熊神社）を掲出しており、その混乱を避けるためで、実際は内宮側神職も祭神名で称する地元神人の唱える社名に従っていたものと解説しています。

なお先程紹介しましたが、江戸初期には、地元の神人たちは伊雑宮を尊貴ならしめようとする中（これを寛文事件または延宝事件という）で、当社を高宮・飯井宮・飯野高宮・猿田彦宮などと称し、荒祭宮に偽そうとしたこともありました。社格は神名式では小社であり、宝暦九年（一七五九）十月に山田奉行水野甲斐守仲福の作成した『伊勢両宮別宮撰末社』では内宮末社とみえますが、現在では伊雑宮の所管社となっています。

御祭神は『倭姫命世記』に大歳神と記していますが、一説によれば、天牟羅雲命の神裔玉柱屋姫命の子孫伊佐波登美命及びその子孫の霊を当社及び御前社に奉祀するとされます。磯部世古氏が所蔵する室町時代の古文書に当社の御神体を御前社に奉遷する記事がみえることから、御前社も今日のような小祠ではなかったともいわれています。虎尾俊哉氏は「栗島神の御子神である神田の土地神とでもいうべきか」と考証されています（『延喜式上』集英社・平成十二年五月刊）。

当社はもと磯部郷民の私営でありましたが、寛文中の伊雑宮再興の時より公営

に属し、式年毎に造替のこととなりました。ただ御前社のみはこれに漏れ、明治二十二年（一八八九）以後、当社の造替並びに御前社の修繕を造神宮使庁において担当することとなり、そして今日に至ります。

## 九、伝説の伊雑宮連理樹

かつて伊雑宮の宮域には「まがり楠」と「連理椿」と呼ばれた伝説の名木がありました。承応三年（一六五四）八月二十八日付で時の祭主大中臣（河辺）定長が朝廷に奏聞した『連理樹奏聞状并勅例』（増補大神宮叢書21『二宮叢典中篇』所収・吉川弘文館・平成二十六年一月刊）によると、「まがり楠」は古くは神木と扱われていたようで、北と南とに分かれていて、南の方の一本の枝がさらに四方八方幾重にも広がり、地を這うように重なり合い、枝と枝との囲みができ、枝葉を蔓延らせながら、先ではまた北の枝の一本と接合し一本として茂っている大楠でありました。さらにこの大楠の側で二株の椿が空間で互いに接合し、一樹となった「連理椿」も存在していました。

往古、連理樹が吉兆とされた風習は、『延喜治部省式』の「祥瑞」の段に「木連理」が下瑞である旨が記載されていることから理解できます。この祥瑞連理樹は、不思議なことに今はいずれも存在しません。枯れてしまったのか、いつ絶えたのか、また宮域のどの場所に立っていたのか不明であります。もし今も残っていたら、大変な話題を呼んでいたでしょう。

## 第四章 風日祈宮・風宮の歴史

### 一、風の神とは

風日祈宮は皇大神宮（内宮）の西南島路川（五十鈴川支流）の南岸に在って、かざりののみや級長津彦命・級長戸辺命男女二神を奉斎するお宮です。儀式帳の「月例四月

十四日条」に「風神社」とあり、太神宮式にも

凡そ毎年七月に、日祈の内人、風雨を祈り平けんがために須うるところの絹四丈（中略）風神已上十座に各三尺（原漢文）

と見えます。現行は内宮の別宮十所のうちの一宮であり、恒例祭並びに臨時祭の官幣奉納の儀は全て内宮に準じています。

そもそも当宮の神系は養老四年（七二〇）編纂の『日本書紀』に

伊弉諾尊、伊弉冉尊と共に大八洲国を生み、しかる後に伊弉諾尊曰く、「我が生む所の国は朝霧有りて薫満かな。すなわち吹撥の気化神となす、号けて級長戸辺命と曰ふ。亦級長津彦命と曰ふ。是風神也（原漢文）

とあって、伊弉諾尊の御子神であり、風神としての崇敬を受けていました。神名式においては、平群郡の条下に「竜田坐天御柱国御柱神社二座（並名神大月次新嘗）」と見えます。また奈良時代の行政法・民法である養老令を官撰にて注釈した『令義解』孟夏の条によれば、大和朝廷において風神は穀物の成熟をつかさどる神徳の故に、広瀬神社と共に早くより天御柱神・国御柱神と称えて大和の平群郡の龍田神社に鎮祭されました。その祭祀はいわゆる風神祭として国家の常祀に列せしめられていました。しかし巻八の『延喜祝詞式』「竜田風神祭」によれば、荒天の神、暴風神の神性が示されているため、御巫清男氏は『延喜式祝詞教本』（神社新報社・昭和三十四年四月刊）で級長津彦命・級長戸辺命とは別の神であると解釈されています。

しかし江戸後期の内宮禰宜荒木田（中川）経雅は『天神宮儀式解』において「此二神は大和国龍田に祭り」とし、「天御柱国御柱と称へ奉るといへり」と同神を示唆しています。これに呼応してか、阪本広太郎氏は『神宮祭祀概説』において同神と見なされています。



## 二、風神社の創立

当宮の創立の年代は神宮文庫に伝わる『元禄勘文』に「倭姫内親王祭祀」と載せているのみで、儀式帳及び太神宮式には創祀については伝えていませんが、儀式帳によれば、平安草創期の延暦時代、既に内宮職掌人として日祈内人と笠縫内人がいました。当時は四月十四日に笠縫内人が皇大神宮、荒祭宮をはじめ一四の宮社に御簀と御笠を供進して風雨の順調を祈りました。また日祈内人が七月・八月の両月に亘って朝夕日毎に祈申していました。七月一日には大神宮司の幣帛を受けて内宮の禰宜が日祈内人を率いて一日から三十日まで連日、朝に夕に風雨旱魃の災いがないようにとお祈りする神事が行われ、八月にも風雨の災禍なきよう祈願を捧げたということが同書に見えています。その祭場はおそらくこの風神社で、二ヶ月、日祈内人は専ら級長津彦命と級長戸辺命の祭祀を掌ったのでしよう。また太神宮式によれば、期間が集約されて七月中の神事と限定されましたが、風雨を祈願する十座の神の中に風神の名が載せられています。

そして井面忠仲の『皇太神宮年中行事』によれば、四月十四日の風日祈祭礼を御笠神事と称しました。そして日祈内人の神事は、平安初期の二ヶ月間、同中期の一ヶ月間から大幅に短縮となり、七月四日の一日のみの行事となっていました。同年中行事には、七月四日風日祈の神態として柏流神事が記されています。この柏流神事は風神に豊饒を祈るお祭り、昭和四年の第五十八回式年遷宮を迎えて出版された『神宮要綱』風日祈祭の条に

又中世以来この七月の神事を柏流と称することあり。度会行忠の神名秘書に、柏葉を流し以て年の豊凶を卜せしと云ふも、其の縁由詳かならざるのみならず、又その行事一も史籍に徴すべきものなし

と記していますが、その初見は鎌倉初期編集の『皇太神宮年中行事』です。また寛保二年（一七四二）に外宮権禰宜度会（久志本）常彰が著した『斎居通』には七月四日両宮共に風宮の神事あり、風雨静にして秋穀の豊ならんことを祈る

の神事にて、又柏流の神事とも云ふ、（中略）按に古昔は柏を水に流し、年の豊凶を占し事有しなるべし、今は無し

と記され、室町初期の記録『明德記』に

三角柏の盃とて（中略）柏葉浪の上に刈落す。神杯に成るべきは必ず浮く、その器に当らざるは、悉く沈て水屑となる。その故を以て神盃を占ふなり。これを柏の神事と号す

とあります。儀式帳及び太神宮式には記載のない神事ですので、古代において執り行われていたか不明です。ちなみに藺田守良は典略において、吉凶を占うこの神事が、いつの頃から行われていたか、その例は知らないと言及しています。鎌倉時代になって特殊神事として固定化し、内宮の風社で三角柏の葉を五十鈴川（現在の島路川）に流して豊凶を占っていたが（『神名秘書』によれば、外宮でも風神社の柏流の記録を確認できる）、近世の頃には絶えたのではないかと想像できます。

なお「風日祈祭」の名は、鎌倉初期の編集とされる『神宮雜例集』にはじめて登場します。鎌倉初期になって風社の祭礼が神宮の年中行事に特に掲記されるわけですから、中世に入って本社が神格が殊更高められたといえましょう。さらにこの時代において著しく風社の靈驗説が広く世上に流布されて、本社は単に風雨祈願の対象神に留まらず、大神宮の神威を代表的に顕し給う靈社であるとの信仰が一般に認められるようになりました。それは前章で紹介した『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』の内容から理解できることです。

## 三、重源と東大寺衆徒

治承四年（一一八〇）十二月二十八日、奈良の東大寺及び興福寺は、平重衡率いる平家の軍勢の火攻めに遭い、諸堂舎の多くが灰燼に帰しました。歴史上知られた南都の焼き討ちです。東大寺造営勸進の宣旨が俊乗房重源に下され、神宮を信仰していた重源を願主として文治二年（一一八六）四月、東大寺の僧綱以下



六〇名が内外両宮を参拝し、大般若經の供養を盛大に営みました。東大寺衆徒は都合三度参宮を致しますが、三度目の建久六年(一一九五)四月十七日に外宮、十八日に内宮で大仏殿供養の法楽(神に対して大般若經を転読する仏式の法要)が営まれました。このとき聖人(上人)が坐禪を組み眠っていると、夢の中に止ん事無き貴女が現れて、その貴女から水精(晶)の紅白珠二顆を授与されました。聖人が誰人か尋ねると、「吾は風宮である」と答えました。夢から覚めると、果たしてその二つの珠が袖の上にありました。この珠は「火執珠」「水取珠」と名付けられました。赤珠である「火執珠」は瑪瑙、白珠である「水取珠」は石英質の水晶に間違いないでしょう。この二顆の宝珠により、重源は造寺の大願を成就できたようですが、『伊勢市史』中世編によれば、通説を否定し、「風宮」から宝珠を授かったのは両宮の法樂導師を務めた解脱上人貞慶(藤原通憲(信西)の孫。奈良の興福寺で法相宗を学び、京都の笠置寺及び海住山寺で供養導師などを務める)と解説されています。しかし重源の生涯の事蹟を記した建仁三年(一二〇三)の記録『南無阿弥陀仏作善集』に大般若六部(内宮三部・外宮三部)を三度供養したという記録があります。これは重源生前の書物であり、彼が大坂の狭山池を改修した翌年に恐らく弟子が纏めた記録でありましょう。ここに重源の治績として挙げられています。また『吾妻鏡』建久六年(一一九五)三月十二日条の東大寺供養の記事中、文治元年(一一八五)八月十八日の回想もみられ、上人が風社の神から二顆の宝珠を授かります。前後の文意から重源上人と読み取れます。この時その宝珠は東大寺の重宝として勅封藏(現在の正倉院)に納められていたことが分かります。『吾妻鏡』と『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』とでは一〇年の差異があり、一三世紀半ば以降に編集された『吾妻鏡』に年次の混乱・誤記があったと考えられますが、いずれにしろ以上三つの文献の内容から東大寺建立勸進の願主である重源が「風宮」から直接授与されたと考える方が自然ではないかと思えます。

東大寺の再建には源頼朝が大檀越としてその事業に合力していますが、『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』は風社の神威が発揚されたことを伝える最古の貴重史料です。太神宮式に毎年七月の例祭が記載されているほど、靈験あらたかな風社ではありますが、実は朝廷直属の官社(神祇官の神名帳に記載され、国家からの幣帛を受ける神社)ではない未官帳の社格でありました。しかし同参詣記の文中に、宮号を受けていない社が「風宮」と記されているくらいですから、古代末から中世草創期にかけて既に神宮所管の諸社とは抜きん出た待遇があったことが察せられます。それは『吾妻鏡』の次の文章からも窺い知れます。文治三年正月二十日条に

合鹿大夫光生御使として、太神宮に奉幣せん為伊勢国へ進発す、神馬八匹(内外宮分各々二匹、風荒祭伊雜瀧原各々一匹)

とあり、源頼朝が太神宮に神馬八匹を献じたのですが、その時の宮社名の中に「風」とあるので、内宮の風社に奉ったものと先学は解しています。ただその時の取次人は度会光生という外宮の権禰宜(江戸後期に足代弘訓等により編集された『考訂度会系図』による)でありますので、外宮の風社を指しているかもしれません。

ちなみに平安後期から江戸初期にかけて外宮禰宜檜垣兵庫家に伝わった『鐔矢伊勢宮方記』によれば、外宮の風社は朝明郡(現在の四日市北部)に岩田御薊(七月四日の風日祈神事料等を納めていた)を所領していたことが分かり、中世の頃には遠方地にも外宮の風社の信仰が広まっていたと考えられます。その意味では外宮の風社と見なす方が説得力があるかもしれません。

いずれにしろ鎌倉幕府は、両正宮に序でわざわざ荒祭・伊雜・瀧原の上に列して風社の名を挙げています。荒祭宮以下の別宮と同列か、いやむしろそれ以上に、これは神馬を風神に捧げたことが注目される事例であり、こういう特別の機能神に対して、並々ならぬ崇敬があった、その一例といえましょう。

#### 四、通海と叡尊

文永・弘安年間に蒙古が襲来して、我が国開闢以来未曾有の国難に際し、朝廷はしばしば公卿勅使（三位以上の高位高官の貴族）を神宮に派遣され、祭主（註）の近親である京都醍醐寺出身の通海僧正もまた院宣を奉じて伊勢に下り、法楽舎（現在の内宮門前町である、おほらい町通りの宇治中之切町にあった）において御祈りを始めようとしたのですが、その時に都合あつて亀山上皇の院宣を手になかったので、彼は正宮の御祈を始めることができず、風社に祈禱を捧げました。通海は大神宮への祈願を特に風社で行つたことについて、祭神級長戸辺命を以て伊勢の国土神たる伊勢津彦神（『伊勢国風土記逸文』によれば、初代神武天皇朝に天日別命が熊野より伊勢に入り、在地の伊勢津彦命が恭順を示す）となし、古風土記にみられるこの神の靈験を讃えて

是知りぬ、風神を仰崇せられば、日月いよいよ照臨の光を添へ、国土安寧の名を伝む者歟（か）

と記し、また

今は輔佐（はさ）の神として内外の社壇を不離者也

として、風神を皇大御神の補佐神の位置にまで昂揚させ、風神に独断で祈請するところがありました。また弘安四年（一二八二）六月には亀山上皇の院公卿勅使が派遣され、宸筆の御願文が奉られ、祭主と共に神宮祠官も異国降伏の祈禱を致しました。七月七日には、内宮二禰宜荒木田（なしみ）尚良、外宮二禰宜度会（度垣）貞尚等十二人が起請の連署を以て、二宮の末社風社の宝殿が鳴動した奇異を上奏致しました。そして閏七月一日巽方（たつみのかた）（南東）の風が俄に起こつて海上鳴動し、靈光かがやいて敵の大軍が、たちまち漂没するという奇蹟が現れました。通海は『太神宮参詣記』において、この奇瑞こそ風社の冥助に他ならないと指摘しています。

またハンセン病患者の救済に尽力したことで知られる西大寺の名僧思円房（えいどん）叡尊

別宮遷宮の歴史について（音羽）

も三度神宮に参詣しています。『性海比丘之日記』（『西大寺叡尊伝記集成』所収）によれば、その三度目の参宮にあたる弘安三年（一二八〇）三月十七日の未刻（午後一時～三時）、叡尊が衆徒と共に内宮を参詣した際、八人の禰宜が正装にて彼等を出迎えました。正宮参拝後、続いて風社（原文には「風宮」とある）を参拝した時に、長官（一禰宜）荒木田（家田）延季が、ここ「風宮」で上人と心穏やかに面談したいと申し出てきました。上人及び性海等高弟五名のみが残ると、一禰宜と八禰宜荒木田（藤波）氏成が来て、鳥居前で談話となりました。そこに突如、侍従と称する女人が現れました。一禰宜は、この女人は卜筮（ぼくぜい）（うらない）に長けている、もし不審なことがあれば尋ねてみられよ、と云いました。上人は、この度異国の難及び天下泰平・仏法繁昌を祈るために参宮したのであるが、果たしてこれが神慮に適つて所願を成就することができるか頗る煩悶（すこぶ）していると答えました。すると女人は神懸かつて、我は牟山神で、君（天照大神）の命を奉じて神のお告げをする、と述べました。その内容は叡尊集團の国家鎮護の御願による法楽を心から喜ぶというものでした。一禰宜は感涙を禁じ得なかったといひます。禰宜連中が風社前で内宮随一の巫女を叡尊に引き合わせたのは、その法力を試す意味があつたとされますが（『伊勢市史』中世編）、結局叡尊の祈願は神慮に適用のであつたことが託宣によつて証明されました。

さて私がここで注目したいのは、中世の頃は風社前には卜筮に長けた巫女がいたということ。東大寺の重源に紅白珠を授けた止ん事無き貴女は風宮である、と先に解説しましたが、その正体は風神の神託を垂れる巫女であつたと考えられます。鎌倉当時はまだ五十鈴川橋（現在の風日祈宮橋）は架かつておらず、五十鈴川（現在の島路川・『瑞垣』第二一九号の拙論「五十鈴川の歴史について」を参照）に置き石を列べた石橋を渡つて風社を行き来（『瑞垣』第二二七号の拙論「風日祈宮の歴史について」を参照）していたと思われます。近代に至るまでは、風社の対岸に物忌（童女）が籠もる子良館がありました。呪術を有した巫女は恐らく子良館

に居住した女性でありましょう。風社前において子良館の巫女が活動していたという事実を知るうえにおいても貴重史料といえましょう。

## 五、宮号宣言

通海が『太神宮参詣記』を著したのは、弘安九年(一二八六)八月から翌年十月にかけてのことであったと専門家は指摘しています。この時点ではまだ通海自身が宮号宣下されていないと文中に記しており、宮号を有してはいませんでした。両宮の風社に宮号が宣下され、両宮多年に亘る宿願を果たし晴れて官社に列せられたのは、弘安の役から十二年後の正応六年(一二九三)三月二十日のことでありました。両宮風社の宮号はいずれも「風宮」でありましたが、内宮の風宮に至っては、外宮と区別するため「風日祈宮」の名称がしばしば用いられるようになりました。

この宮号によって神殿改造の議が起こり、その様式について神宮に勅問されることがあり、嘉元二年(一一三〇四)の第三十三回内宮式年遷宮に際して、いよいよ神殿の構造を増大させることになりました。神宝と飾金物は伊雑宮に、御装束は伊佐奈岐宮に準拠して、男女両親の御料が調進されました。『皇代記付年代記』によれば、明德四年(一一三九三)に遷宮が行われたことを確認できますが、その後は式年造替の記録は見られず、沙門乗賢がかつて御裳濯川(現在の五十鈴川本流)に大橋(現在の宇治橋・「瑞垣」第二二三号拙論「宇治の大橋の架橋について」宇治橋渡始式の変遷をめぐって」を参照)を架橋した縁故を以て当宮の再興を計画し、神宮及び公家の許可を得、衆庶の寄進を募集して神殿以下を造営し、文明十一年(一二七九)九月二十三日に仮殿遷宮を斎行(『風日祈宮遷宮次第行事』)致しました。その後は暫く文献に記載は見られず、近世に入り、慶長三年(一五九八)六月の仮殿遷宮(慶長三年内宮仮殿記)を経て、同十七年に正遷宮(近代に至るまでは式年遷宮をこう称した)が行われました(『孝亮宿祢日次記』)。そして寛永八年

(一六三二)八月(慶安二年内宮遷宮記)、慶安三年(一六五〇)九月(同記)、寛文十年(一六七〇)八月(『氏富記』)と正遷宮が斎行され、以後両正宮の翌年に式年遷宮が執り行われるようになりました。

## 六、外宮別宮風宮

外宮別宮風宮は本宮の域内、土宮の東に鎮座されます。もと風社と称する末社であったことは前述しました。延暦二十三年(八〇四)撰述の『止由気宮儀式帳』に「八月の風を祈る幣帛の絹一丈五尺、木綿一斤、麻一斤」とあって、日祈行事が七月例には見られませんが、内宮の「八月の風雨を祈る」祭りに対応する神事が古くから行われていたことが分かります。両宮や別宮及び諸社を対象とした日祈行事は延暦以後に整備されたのでしょう。

しかし外宮風の神のお社としての初見は神宮考証学の泰斗御巫清直著『二宮管社沿革考』に引用されている『長徳三年検録』(九九七)です。そこには「風社在高宮道棒本」(風社は高(多賀)宮の道の杉本にあり)とあり、今その杉が存在すれば千数百年の名木となり、話題を集めていたでしょうが、残念ながら現在それらしいものは見当たりません。しかし鎌倉末期に度会(村松)家行が著した『類聚神祇本源』に「神宮(※外宮正宮のこと)の南、土宮の東にあり、但し南向きに坐す」(原漢文)と記述していますから、元から外宮宮域内の現在地に鎮座されていたと思われます。鎌倉後期に度会(西河原)行忠が著した『古老口実伝』には「風神社」とあって、神嘗祭には懸税(かけちから)の稲四把の供進があり、宮号宣下以後に稲が奉献されたこの例は注目に値します。

また『神宮雜例集』の年中行事に七月三日外宮日祈内人請幣の事、同四日、二宮風日祈祭の条に外宮の風宮祭直会の事等が見えるので、この頃に至り内宮と同じく風神の祭祀が二宮の年中行事にも編入され、且つ日祈内人の職掌人をも設けられたのでありましょう。内宮の風日祈宮と共に正応六年(一二九三)三月に宮



号を宣下され、序で嘉元二年（一二〇四）の遷宮で社殿が増作されました（『神宮典略』・『二宮管社沿革考』）。鎌倉末期から室町初期には小殿<sup>おど</sup>があり、神殿二字が並立していました（『神宮要綱』）。『外宮応永記』によれば、応永三十一年（一二四四）に正遷宮が斎行されましたが、その後は久しく造替は行われませんでした。殊に室町中期に荒木田（藤波）氏経が著した『氏経卿引付』享徳三年（一四五四）七月二十二日条に当宮西の棟持柱が顛倒し、壁板並びに板敷等が頽落<sup>たらく</sup>したことに由り、御正体<sup>むしょうたい</sup>（御神体）を調御倉<sup>みつぎくら</sup>（かつては、現在の御酒殿の近辺に立っていたと思われる<sup>まち</sup>）に奉遷しました。奇しくも前月には内宮の風日祈宮も顛倒し、内宮禰宜が解状を奉つて速やかに造替を願い出たのでありました。外宮の禰宜は正殿御屋根廻り上部の千木・鰐木<sup>ちぎ</sup>・鯉木<sup>かつおぎ</sup>・薨覆<sup>いらかおおい</sup>・泥障板<sup>あおりいた</sup>等の頽落をみかね、十月、正宮に併せ風宮以下別宮造宮の速やかな執行を請願しました。

記録上は造替が適ったのか不明ですが、『外宮子良館旧記』によれば、延徳二年（一四九〇）に高向屋二頭大夫の私財献納により、漸く仮殿を造進しました。この時御正体を御政印御倉（調御倉の別称）より奉遷したとありますから、三十八年間に及ぶ長い年月、調御倉に臨時御動座されたままで、風宮の大修繕も行われない状態に据え置かれていたと考えられます。天文七年（一五三八）二月二十一日には甲斐国守護武田信虎の寄進（『司家之旧記』『永正九年宮司引付』）、天正三年（一五七五）三月二十八日には美濃国稲葉某の費用献進（『外宮遷宮近例』）により仮殿遷宮が斎行され、慶長十七年（一六二二）には徳川幕府（『外宮召立文案』）により式年造替が再興されました。

そして元寇から数えて六百四十年、欧米諸国の東洋進出は再びこの島国を脅かしました。一步誤れば列強の植民地となりかねない緊迫の時勢に際会して、はからずも想起されたのはこの風宮のご神威でありました。そこで朝廷では文久三年（一八六三）五月、皇大神宮別宮風日祈宮と当宮に十七日間の御祈禱を捧げられました。その御教書には、国内一和は神明の加護によってのみ実現され、それな

くしては国家の危機を乗り切ることはできない、という内容のものが記されていました。六百年を隔てても、日本人の信念は一貫していることを理解できます。

（註１）職掌は、禰宜以下の神職を統率して神宮の祭祀に従事すること、及び神宮の経済的基盤である神郡・神領・神戸等を統轄することなどであった。原則として、朝廷が任命する律令の官人（令外の官）で、在地の人間が補任される禰宜以下の神職とは一線を画していた。宮司である大神宮司は奈良時代前期には成立していたことが立証されている。任期は六年で、神郡内の国司の関与を排除し、租税の検収権も手中におさめた。政務は雑多であったため、神郡全体に及ぶ膨大な案件を処理することがやがて困難になり、貞観十二年（八七〇）に一員が加えられ、大神宮司は二員となった。しかし両者が対等な関係では政務がかえって擁滞したため、元慶五年（八八二）には大司（大宮司）・少司（少宮司）の別が立てられた。それでも政務の膨張に大司・少司だけでは対応できなくなり、延喜二年（九〇二）に権大司（権大宮司）が設置され、宮司は三員となった。律令制の弛緩と共に宮司の三員制も排除され、近世には大宮司一員が任命されるに留まった。

（註２）近代以前の祭主は神宮側の職掌ではなく、宮廷の官人で、公家が務めた。祭主職の起源については、『太神宮諸雜事記』（平安後期に選録された荒木田氏の家伝書）に、第十二代景行天皇三年（七三）に祭官が定められたとあり、平安末期から室町初期にかけて編集された『祭主補任』によれば、第三十八代天智天皇（称制六六二・即位六六八―六七二）元年（六六二）に祭官を改め祭主とし、中臣朝臣大嶋を祭主に補任したのが始まりとされる。この頃はまだ官職名ではなく神宮の祭儀に朝使として参向する齋主<sup>いはいぬし</sup>的な存在であった。朝廷の官職に定められるのはそれ以降のことと思われる。

なお「祭主」は、『養老令』第二「職員令」（養老二年／七一八）に規定がない「令外の官」であるが、大中臣淵魚が弘仁六年（八一五）から承和九年（八四二）まで祭主職にあったことが知られることから（『続日本後紀』）、平安初頭には正式に設置されていた役職と考えられる。祭主は神祇官に本官をもつ五位以上の中臣（大中臣）氏が補任されるようになっており、時代が下るに従い、この任に就く者が中臣氏の氏長者と目されるようになった。古代においては京に在住していたが、鎌倉から戦国時代にかけては戦火を避けるため伊勢に居住し、伊勢と京とを往来していた。戦国末期には伊勢の屋敷を払い、京に戻り定住する。以来近世の間は、お祭りのために京から参向した。



（註3）本文では外宮の調御倉<sup>ちうぎやうくら</sup>について解説したが、内宮の御倉は古代に四宇あり、そのうちの一つが調御倉であった。御稻御倉に次ぐ第二の御倉で、もともとは神領から調進された絹や糸<sup>いと</sup>を納める倉であったので、庸御倉とも称した。平安時代後期には「内宮政印」の公印や御鍵等を保管した倉となり、御政印御倉とも呼ばれるようになった。鎌倉時代に一度荒廃し、再建された記録が見られる。寛正三年（一四六二）の第四十回遷宮の頃までは存在したようだが、それ以降は再建されなくなった。

## 第五章 土宮の歴史

### 一、土御祖社

外宮第一別宮多賀宮の石壇を下りた所に土宮が鎮座します。正宮からは「中の御池」（宝永四年（一七〇七）の地震で寸断された池）を隔てた場所、東向きの殿舎です。古くより東を向いて立っており、平安時代末期に南面にしようという議論が朝廷内であったようですが、そのまま現在に至っています。

もとは土社と称し、別宮の列には加えられていませんでした。延暦二十三年（八〇四）撰述の『止由気宮儀式帳』には所管神社の内にさえ挙げられず、延長五年（九二七）成立の『延喜式』の「太神宮式」や「神名式」にも記載されていないことを鑑みると、上代においては極めてささやかな一小祠にすぎなかったのでありましょう。それが昇格して別宮に列せられ、土宮と称せられることになったのは、ずっと下った平安末期のときなのです。しかし古来山田原の鎮守の神として大宮地主神（大土乃御祖神）を奉斎しており、『止由気宮儀式帳』に「宮地神」と記され、度会（村松）家行が著した『類従神祇本源』に所引される一条天皇の長徳三年（九九七）に成立した『長徳検録』に始めて豊受大神宮所属の田社三三前の一つに「土御祖社」の名称で記載されています。田社とは今日の末社に相当します。『止由気宮儀式帳』に六月、十二月の月次祭に十七日を以て大宮地神に

由貴の神酒一缶を供進することが見え、その大宮地はまさしく本社を指すものと思われるので、早くから宮域内に奉祀されていたものであることが知られます。さて、未だ独立神社の形を具えなかった田社が別宮の宮号宣下を受けるとするのは破格の二階級特進でありました。何故田社が別宮となったのかというと、その理由は二つ考えられます。まず一つ目は、古くから正宮の祭祀と不可分の関係において行われていたからで、年中行事の最重儀である神嘗祭と六月・十二月月次祭の三時の祭（三節祭）には、この宮地神も祀ることになっており、その祭日は正宮に序で別宮高宮（多賀宮）と同日に行われていたからでありましょう。それからもう一つの理由は、洪水による宮川の脅威という事実もあったからです。土御祖神社は崇徳天皇の大治三年（一一二八）六月五日に度会川（現在の宮川）の堤防守護神として別宮に昇格しました。また同年六月十日には、豊受大神宮の所管に属する撰社志止見社と大河内社、末社の打懸社の三社に同時に従四位下の神階が奉られました。この三社ともに当時の度会郡沼木郷山幡村（今の伊勢市辻久留町）に鎮座していますが、ここは高倉山の西側で宮川の東岸になりますから、土御祖社とともに洪水防護、宮河堤の守護をこめられた社であったことが『類従神祇本源』によって理解できます。

### 二、宮川の洪水

宮川は度会川または豊宮川とも呼ばれ、鎌倉時代初期の編集とされる『神宮雜例集』に所載される延長四年（九二六）四月十一日の神祇官符によると、遠四至に

東は赤峯并に樋手の淵を限り、南は宮山を限り、西は粟尾の岡并山幡の淵を限り、北は宮河を限る（原漢文）

とあり、「北は宮河を限る」と載せています。御園方面の高向・長屋・王中島付近に旧河道の痕跡がはっきりと残されており、近年の研究では中世後期頃までこの付近に宮川の支流である北宮川が流れていたといわれています。北限は現在の御

蘭地域よりも内が領域であったのでありましょう。久志本常彰は『神民須知』で  
此宮川古ハ外宮ノ北ニ流レ、今ハ西ヨリ乾方ニ流ル、也

と述べています。須知の記述は、宮川堤の改修、河川の整備等により支流の流水  
が絶えたりして、水脈が変わったことを意味しています。

伊勢市域を流れる河川には、外城田川・宮川・勢田川・五十鈴川など水量の豊  
富な河川が多く存在しますが、古来神都のまちは洪水による河川の氾濫に悩ま  
され、住民の生活に甚大な被害を及ぼしていました。殊に外宮の門前町の山田とそ  
の周辺地域は宮川の氾濫原に位置し、しばしば洪水に見舞われていました。宮川  
の治水の歴史は非常に古く、今日是一条の水流になって伊勢市街の西を流れてい  
ますが、往古は伊勢市の南方上流において水脈が数条に分岐し、宮川の本流から  
別れた支流が幾筋も東に向かって流れていたと思われます。現在の市街の大半は  
その流域に属し、洪水のある度に少なからず宮域にも被害が及びました。

そこで正保元年（一六四四）八月二十八日の大洪水による堤決壊の後、山田奉  
行石川大隅守正次が幕府からの巨額の経費を得て（同三年）、外宮祠官の榎倉・  
喜多二氏により再補修が加えられ「大堤」となり（同四年四月）、貞享二年（一六八五）  
の大堤の上方に「棒堤」を築くことで大洪水のための決壊の危機を免れるに至り  
ました。

なお雑例集の西「山幡の淵を限り」とは、度会（西河原）行忠が弘安八年（一二八五）  
に撰述した『伊勢二所太神宮神名秘書』（以下神名秘書と表記）に、志等美・大河  
内二社は沼木郷山幡村にあると見え、江戸中期に加藤（秦）忠告が執筆した『宮  
川夜話草』にも

寛文撰社再興ニ、宮川ノ辺ナル矢幡ト言フ岡ニ建テ玉フ、打懸社ヲ加エテ三  
社座ス

とあり、西限の境も宮川より内の右岸と考えられ、西北の境は宮川本流（度会川）  
と支流（北宮川）であったと思われます。

### 三、宮号宣下と御祭神

以上述べましたように平安後期の頃は度会川出水の被害は絶えず、その度に地  
主神たる当宮に冥護を祈られていたのですが、神宮の解状に基づき朝廷内でも仗  
議が重ねられ、もと五尺許であった殿舎が、宮号宣下後七年を経た、保延元年  
（一二三五）に造宮使の責任下増大されることとなりました。同時に従来鉄製の  
御金物を金銅に改め、御装束も高宮（多賀宮）に準拠して調進されました。また  
造宮に際し南面としてはどうかと諮られもしたようですが、原初のまま前例踏襲  
となりました。本件については後ほど詳しく解説します。

ところで、宮号宣下について記述した文献を紹介しますと、度会（西河原）行  
忠の『神名秘書』に

土宮三座 太神宮の南、多賀宮の山の麓にあり、

大治三年六月五日官符、社を改めて宮と称し、月次・神嘗・祈年の祭の幣  
に預るなり、是れ宮河堤守護の為なり

と見え、また『類従神祇本源』に引用する「社記」には、

大治三年六月五日、宮号宣下、度会河の堤の守護の為なり

と記されています。これに関しては特に問題視する点はありませんが、次に注意  
すべき点をお伝えします。現今土宮の御祭神は大土御祖神一座を奉祀しているに  
拘わらず、神道五部書中の『御鎮座伝記』に

山田原地主大土御祖神二座

大年の神の子、宇賀之御魂神一座、素戔鳴尊の子、土乃御祖神一座、亦衢  
神大田命、神寶石の寶形一面座す、是れ神財なり

と記し、『御鎮座本紀』に

素戔鳴尊の孫、大土祖一座、衢神大田命一座、宇賀魂大年神一座、山田原の  
地護神と定め祝ひ祭るなり、

大土祖は霊、鏡に坐す、大田命は霊、銘石に坐す、宇賀魂は霊、瑠璃壺に

坐すなり

とあり、『倭姫命世記』には

土御祖神二座

宇迦之魂神、土乃御祖神、形鏡に坐し、寶瓶に座す

とあり、さらに『神名秘書』には、「大年神・宇迦魂神・土御祖神の三座を祀る」としていることとあります。文献によって神名が異なりますが、複数の御祭神を奉祀しているということと共通しています。

#### 四、地主神

さて喜早清在は『毎事問』において

問、山田原地主土祖神ハ外宮ノ別宮ニ祭り、宇治ノ地主神ハ猿田彦神ヲ内宮ニ於テ殿舎モ無ハ何ゾヤ、答、土宮ヲ地主神ト云ハ山田原ニ限ラズ都テ土地神ナリ、然ニ山田原ト云字ヲ上ニ懸ルハ大治三年度会川堤守護ノ為ニ宮号宣下アリシ故ナリ、又猿田彦ヲ宇治地主ノ神ト云ハ全ク宇治ノミノ地主ノ神ナリ、共ニ地主ト称スレドモ義理格別ノ事ナリ、対シテ論ズベカラズと土宮は山田原の地主神に留まらず全ての土地神を表すのに対し、猿田彦神は宇治のみの地主神と言及しております。これに対して『毎事問失考』（作者は恐らく久志本常彰であろう）では

此答甚非也、猿田彦神ハ宇治ノ土公ト云ニツキテ宇治ノミノ土神ト思ヘルニヤ、伝記ニ、猿田彦大神吾是天下之土君也、ト曰ルヲ不考シテ、妄ニ答ルト聞エタリ

と清在の説が否定されています。なお藺田守良は『神宮典略』において、この『御鎮座伝記』の記述を受けて

山田原地主とは、大国玉神と宮地の霊と二神に云如くおぼゆ

と全く別説を打ち立てています。さらに阪本広太郎氏も『神宮祭祀概説』におい

て次のように論及されています。

地主神は宮域内に鎮祭することは両宮を通じての式典であり、又それが神宮祭祀の上に軽からぬ位置を占めつつあることに由って、上代人の地主神に対する思想の一端を此に窺ふことが出来ると思ふとともに、又この思想が基礎となつて、次の鎮守神の思想に移行するものではないかと考ふるのであります。而して当宮の祭神は前述の如く現在も大土乃御祖神一座となつて居り、普通にこの神を以て古事記に見ゆる土之御祖神（大土神）即ち素戔鳴尊の神裔神と解して居るのであるが（神宮大綱等）、しか果してこれが上代からの地主神であるか何うかに就てはなほ研究の余地があると思ふ。但しこの解釈は相当古くから行われたと見えて、度会行忠の「神名秘書」に、本社の祭神を三座として、この神の外に、同じく素戔鳴尊の神裔なる大年神、宇迦魂神を配して居るから、かゝる解釈は早く鎌倉時代から外宮の神道学者の間に行われたことが知らるゝのであるが、しかし之は普通名詞と思はるゝ、神名又は社名を以て、直に古典に見ゆる神名に宛てはめやうとするもので、例へば国魂神を以て出雲神系の大国玉に配すること、同様に、其処に無理があるやうに思はれる。（中略）内宮にもその摂社に、其地方の地主神を祀つた大土社（大土御祖神社、神名帳）があつた、その祭神は儀式帳に国生神の神裔神を祀ることを伝えて居り、又内宮宮域の地主神たる興玉神もこの地域に限定する国玉神を祀るものと考へらるゝ、処から、本社神も、必ずしも出雲神系の神と見るべきでなく、即ち山田原の国魂神であつて、従つて同じく外宮の摂社にして山田原に鎮座せらるる度会大国玉比売神社や度会国御神社等と同一神系の神と見るべきものであると思ふ。

ところで、末社から一躍して別宮に昇格されたのは三座の中の土御祖神であり、他の神には及ばなかつたのでしよう。大年神と宇迦魂神は素戔鳴尊の神裔であり、鎌倉時代の外宮祠官の間に大宮地主神を古典に見られる神名にあてはめよう

とする思想から複数神が祀られたのではないかと考えられます。土御祖神は大年神と天知迦流美豆比売との間の御子神で、中世伊勢神道では山田原の地主神としての信仰崇敬が篤く複数神奉祀したのでしょうか、朝廷ではあくまで大宮地主神として土御祖神を別宮の祭神とされたのでしょうか。今日も別宮土宮は大土乃御祖神一座として拝しています。

なお守良は『神宮典略』において

神名式、河内国丹比郡狭山堤神社ませり。此はいはゆる狭山池の堤を防護の為に宮社の御制有りとおぶゆれば、此土宮と同じ例なり

と言及しています。狭山堤神社は近隣の狭山神社と共に『延喜神名式』に登載される式内社ですが、飛鳥時代の推古天皇の御代に築造されたといわれており、建仁二年（一二〇二）に俊乗房重源の手により狭山池は改修され、さらに慶長十三年（一六〇八）に片桐且元により堤が修築されます。狭山堤神社は『古事記』によれば第十一代垂仁天皇の御子である印色入日子命（いしきりひこのみこと）を御祭神とします。地主神とは直結しませんが、堤防護の神を祀るという観点で、守良は大土乃御祖神と同じ立場であると考えたのでしょうか。守良の思想的背景として阪本氏同様大土乃御祖神は出雲神系の国津神としての固定観念は無いように思われます。

## 五、東向きの殿舎

殿舎はもと五尺許であったのが、神宮の解状に基づき議論が重ねられ、宮号宣下後六年を経て保延元年（一一三五）に造宮使に命じて増大され、同時に従来鉄製の御金物を金銅に改め、御装束も多賀宮に準拠して調進されました。金銅飾金物を奉飾していたことは『応永二十六年送官符』に見えますが、近世の頃には絶えていたことが分かります。また『神境紀談』には次のような記述が見られます。

土宮の北に地護宮と称する小祠があり、何れの神をお祀りしているのかは不

明であるが、旧は高倉山の奥に在ったのを慶長十九年（一六一四）に御炊物忌父度会重正が再興して今の所に移し作った、地護の神徳を崇め祭って別に小祠を建てた、兒宮と称するのは和訓の表現による誤りである

との内容が記されています。山田原の地護の神という信仰が、いつしか兒の神ともされたために、土宮のほか小兒の守護神を祀る祠を設けて民間信仰に応答したものでありましょう。寛政九年（一七九七）に薮関月が著した『伊勢参宮名所図会』にも図示されているのを確認できますが、明治維新でこの祠は廃止されました。

土宮は東向きの宮であり、別宮昇格によってこの宮の殿舎を他の別宮に準じて大拡張すべきや否や、またこの度の造替にあたって南面に変更するかどうかと、かれこれ評議した当時の閣議の状況は『長秋記』長承三年（一一三四）六月二十四日条に詳しいですが、「昔より東向きにすえ奉る。何ぞ改訂すべけんや」という権中納言藤原宗能の前例尊重論が通って改定をみなかったといえます。この宮の鳥居というのは未社当時の玉垣に付属していた門であって、高宮には中門があるのだからこれに準じる意味で残してもよいではないかと、これも中宮権大夫宗能の意見で一決したといえます。御卜によって決しようという内大臣藤原宗忠や参議左中将藤原成通の提案が通らないで、前例尊重という伝統主義が勝ったのは注目に値することです。

そして応永以降は式年遷宮は行われず。造替遷宮遅延に及び、延徳二年（一四九〇）は高向源右衛門、天文十五年（一五四六）は江州人磯野丹波守員正、天文二十年は備中人某の寄進により漸く仮殿遷宮を行っていましたが、徳川幕府に至って、慶長十五年（一六一〇）十月仮殿遷宮を行い、寛永八年（一六三二）九月に至って遂に式年造替の制度に復しました。但し従来の御敷地が狭隘なるを以て、四十二年造宮に際して南方に新地を設け、これによって完全なる南北並列の御敷地を見るに至り、今日に及びます。



## 第六章 月夜見宮の歴史

### 一、宮号宣下と遷宮

月夜見宮は伊勢市宮後町に鎮座し、月夜見尊並びに月夜見尊荒御魂を奉祀します。外宮北御門口から北へ約三百メートル、宮川の方から伊勢の市街地に約二キロメートル入ると、県道鳥羽松阪線の右側に接している森がその宮域で、三方を堀がめぐっています。創立の年代は不詳ですが、既に『止由気宮儀式帳』に豊受宮所管度会郡神社二四座の筆頭に月讀神社正殿貳区を載せ、太神宮式にも度会宮所撰一六座の首に月夜見社の表記があり、神名式所載の社でもありました。つまり第一別宮高宮（多賀宮）に次ぐ重い処遇であったのです。祈年祭・神嘗祭の官幣に与り、また儀式帳の時代より早く造宮使が式年造替を担当しており、二十年に一度の式年遷宮も行われていたようで、別宮に準じる格式であったと考えられます。その他、月次祭・神嘗祭の三節祭に至っては、祭月十八日を以て禰宜・内人等参集して、祝部を率いて由貴祭を奉仕することになっていました。ここに特殊の待遇を受けていたことが理解できます。

外宮撰社筆頭でありながら別宮に加えられたのは田社（末社）土御祖社よりも遅く、承元四年（一一二〇）五月、土宮の例に倣って昇格されました。次いで建暦元年（一一二二）九月十五日の第二十八回豊受太神宮式年遷宮斎行後の十二月十八日に月夜見宮も遷宮が行われ、このときに殿舎が造作されました。当宮は皇大神宮の月讀宮と同じく古くより正殿が二区あって、月夜見尊荒御魂を別殿に奉斎していましたが、このとき月夜見尊の本殿を増大したため、荒御魂宮を小殿と称することとなりました。しかし応永二十六年（一四一九）一月四日に月夜見宮及び小殿・忌火屋殿等が炎上（『兼宣公記』）し、その後は小殿の再興は見るに至りませんでした。

そして式年造替は久しく行われず、天文六年（一五三七）六月十三日には駿河国守護今川氏親の献金を以て仮殿遷宮を行い（『豊受皇大神宮遷御近例』）、慶長十七年（一六二二）十二月二十五日に江戸幕府の手により式年遷宮の復興を見るに至り（『外宮召立文案』）、次の寛永八年（一六三二）九月四日に式年遷宮が斎行されました（『寛文九年外宮正遷宮記』）。しかしその御屋根はなお仮殿の例により大板葺であったのを、寛文一〇年（一六七〇）九月に萱葺に改めました（『繼彦神主日次』）。

### 二、宮域と壕

『類從神祇本源』によれば「在神宮北、四面堀百二十二丈、四至去瑞垣東西南北二十二丈」とあり、当宮の宮域は瑞垣から四方各二十二丈（約六六メートル）、周囲には長さ一二二丈の壕をめぐらしていました。しかし中世以後の乱世に境界も不明になり、山田市民が次第に宮域を侵して人家を建て、殊にその南方の妙鏡寺にあつては、壕を埋めて寺地を拡大し、堂宇を建造していたために世上では築地寺などと言われた程でした。外宮一禰宜檜垣常晨は深くこれを畏み、時の山田奉行八木但馬守宗直に訴え出しました。八木奉行は敬神の念に篤い人として知られており、直ちに江戸幕府に稟申して、四方の民家を退け、妙鏡寺の後園の藪を伐り払い、客殿を破却し、宮地として方四町を劃定しました。そして人家の侵すことを禁じ、総て一禰宜の差配に任すこととしました。周囲には堀を穿ち、堤を築かせました。これを以て当宮は中世以前の面目を取り戻すことができました。寛文元年（一六六一）十一月から翌二年八月にかけて執り行つた事業でありました（『常基古今雜事記』）。

これより十七年を経て、延宝六年（一六七八）の頃になると、堀もいつしか埋もれてしまい、また人家が宮地を侵すようになりました。時の外宮一禰宜松木満彦はこれを見て深く神慮を畏み、山田奉行桑山丹後守貞政に訴え出しました。桑山

奉行は先の八木但馬守にも劣らぬ敬神家でありましたので、改めて堤を堀の内側に築かせ、大道を拡げ、六月十八日には宮域の四隅に境界の標木を樹て、二十三日にはさらに制札も立てて、永久に侵掠の憂いがないよう努めたのでした（足代弘訓『世々の恵』）。現在の宿衛屋は明治十年（一八七七）三月に建設され、幾度の改修を経て、平成二十四年十二月に全改築されました。

『神名秘書』には地名を大河原と伝えますから、昔は宮川の分流がこの辺りをめぐっていたと想像できます。後鳥羽天皇（在位一一八三―一九八）の御代には公卿勅使を立て、宸筆の宣命も以て神宮に祈願されること六度に及びましたが、次の土御門天皇（在位一九八―一二一〇）もまた法皇御悩による病氣平癒のため、あるいは辛酉の御祈り、甲子の御祈り、さては三合歳厄の御祈りなどと、陰陽師たちの奏言もあつてか数度の勅使をご差遣になりました。これら天皇によるご報告が、月夜見宮の別宮昇格の要因の一つと考えられましょう。

なお『応永頭工日記』によれば、応永二十六年（一四一九）正月四日に月夜見宮炎上の記載が見られます。このとき月夜見宮ばかりでなく同小殿、川原社、忌火屋殿が焼失しました。この記録より室町当時は宮後の月夜見宮にも忌火屋殿が存在したことが分かります。同日記にある「川原社」とは、『神名秘書』の記録より月夜見宮の東にあつた高河原神社を指すのでしょうか。高河原神社については後述致します。

### 三、並木道

月夜見宮から厚生小学校前を通り外宮北御門に通じる道を現在神路通りと呼びます。しかし出口延佳・岩出末清・青山正清等と共に豊宮崎文庫の創設と経営維持に貢献した與村弘正が著した『勢州古今名所集』によれば、北御門からこの月夜見宮への二町（約二一八メートル）の大路には並木が立ち並んでいたもので、この一直線の道を昔は並木路と呼び、不浄の者はその中央を通行することを遠慮し

ました。中世の頃は並木が無くなり、家居が並び立つと、石畳を設けて汚穢の人はその石の外を通っていたといえます。古老の伝えに

宮柱立てそめしより月讀の神の行きかふ中の古道

月よみの宮つかへとつとに起通ふ神路を清めさらめや

という二首の古歌が今日に伝わります。この二首の短歌は外宮と月夜見宮を御祭神月夜見尊が往来されるという信仰の表れであり、外宮の御饌殿で天照大神を祀るのに対して、ここは弟神であらせられる月夜見尊であるから往来なさると考えたのかもしれませんが、弘正の他にこの伝承を紹介している祠官はいないので、真偽の程は定かではありません。伊勢の市内にはカリヤ橋といって、飯屋（月事の女子のための共同建物）の女性が通行する橋を特に設けた所もあつたくらいに、市民たちの禁忌の感覚には格別のものがあつたのでしょうか。この並木道にまつわる古歌も、あるいはそういう戒めを説明したものであつたと思われる。

### 四、月の変若水

小堀邦夫氏は「月の変若水」について次のように述べられています。

小学生のころ、中秋の名月の夜、子供たちは思い思いの集団で家々の窓辺にお供えしている里芋や団子を、勝手に賑やかに頂戴して回りました。十五夜のお月さんへのお供え物を子供たちが食べて回ることも、かつては大切な意味のあつたことと想像できます。月影の中にどのような思いを遠き世の人々が抱いてきたのか、『万葉集』から一首を拾ってみます。

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月讀の 持てる 変若水い  
取り来て 君に奉りて 変若得しむもの

「もがも」は、ある状態の実現を希望する助詞で、〴〵そうならいいなあ〴〵と現代語では理解してよいかと思われます。「月讀」はツキの交替形ツクを取った場合、ツクヨミとよむこともあります。月の神という意味です。「い

取り来て」の「い」は古代の多くの動詞の頭に着き、その語を強調する接頭語です。二箇所に出てくる「変若<sup>をち</sup>」の語は動詞オツの連用形で、通常「若返る」「蘇生する」意味と考えられています。月の神の靈威を受けて若やいだり、壮健になったりすることを意味しますから、おそらく、ヒコ・ヒメがオトコ(男)・オトメ(処女)になり、つまり成年を迎えるときにも、その靈威を受けると信じられていたと思われます。オツの語から、オトコ・オトメのオトが生まれたと考えられます。

― 天の掛橋がもつと長ければいいのに。高山ももつと高ければいいのに。月讀の神が持っている若返りの水を取ってきて、あなたに差し上げ、若返らせることができるのに。

さきの『万葉集』一首のおおよその意味は右のようでしょうか。年老いた夫か、父かの若返りのために、月の神の靈威をいただきたいと願ったのです。漢字で「月讀」と書くため、月を数える(読む)の意味からツキヨミまたはツクヨミとなったと説かれますが、私は月夜・ミ(神靈、ミ系の神、山つみのミ)と見るべきではないかと思えます。古代では月夜は、月のある夜と、月の光(ツキカゲ)との二つの意味があります。人々は月影をもたらず不思議な働きとそれを司っている靈威あるものに、神を信じていたのです。十五夜の明るい路地を子供たちはお供えの里芋や団子を食べ歩いて、大人(成人)になって行きました。

(小堀邦夫著『伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味』、五六頁―五八頁)

『続日本紀』によれば、宝龜三年(七二二)八月、大きな台風の災害があったとき、卜いの結果、伊勢の月讀神の祟りだとされた記事が見られ、このとき以来、九月の祀りには荒祭神に准じて幣馬を奉ることになった訳ですが、上古から月讀神は靈威ある神と信仰されてきたことが『続日本紀』の記録と小堀氏のこの解説からうかがい知れましょう。

ところで内宮と外宮共に月讀宮(月夜見宮)があるのは何故ですかと、別宮に当直していると参拝者からよく質問を受けます。近世のある説によれば内宮月讀宮は月陰の義を取って本宮に日月陰陽の理を示し、外宮月讀宮は水陰の義を取って本宮に対して水土陰陽の理を示すといえます。また内宮は月讀、外宮は月夜見と称する倣いと近世の頃から表記の区別をする例もあったようです。しかし清在は『毎事問』において皆妄説であると退けています。殊に月讀・月夜見は文字が異なるだけであって、『万葉集』に文字を変えて記している事例を挙げれば枚挙に遑がないとまで指摘しています。

内宮は荒木田氏、外宮は度会氏がお宮の維持管理をしていた訳ですから、それぞれの氏族が靈威ある月讀神をお祀りしたのは至極当然のことであつたと思料致します。

## 五、高河原神社の由来

宝永四年(一七〇七)に伊勢山田の書肆藤原長兵衛が上梓した『伊勢参宮案内記』に、月讀宮二座は「宮後北の端の森に在」と記されています。そして宮後については「外宮の後に当れる町ゆへに、宮後といふなり」と解説されています。

なお先程も触れましたが、豊受大神宮別宮月夜見宮の北辺にも宮川の一派が流れていたことがわかります。清在の『毎事問』中に

今鍛冶屋垣外ノキトラト云フ所ハ其ノ流ノ北浦ナリ、此ノ辺人家無クシテ此ノ社地ヨリ東辺皆ナ河原ナリ、其ノ川風ノ吹キ上ゲタル所今ノ吹上町ナリ、故ニ古記ニ吹上村ト書ルアリ、其レヨリ西ニ当テ河原アリ、是レ今ノ西河原ナリ、此ノ社ノ旧地ハ今藪ノ世古ニ在テ石壇アリ、毎年十月ニ高河原ノ祭ト称シテ郷民輪番ニ此ノ石壇ニ火ヲ燭ス事アリ、寛文三年精長朝臣再興ノ日此ノ處ニ營建スベカリケルガ民家ノ中モニ建難ク穢氣ノ畏モ有レバトテ神名秘書ノ注ニ月讀宮ノ東ニ在リト云ニ随テ今ノ所ニ建タルナリ、又問、月讀宮ノ



前ノ町ハ宮ノ前ナレバ宮ノ前町ト云ベクシテ宮後町と云ハ何ゾヤ、答、此レ外宮本宮南面ニテ其ノ後ヘニ在ル町ナル故ナリ、前山ト云フ号アリ、前山ト宮後トハ相ヒ対スルナリ

とあり、月夜見宮の裏手にあたる北浦をキトラと称したこと、北辺のキトラから東辺は人家がなく河原であったこと、宮川の風の吹き上げる地を吹上町と称し、現在もその地名が踏襲されていること等が述べられています。戦前の吹上村の西もかつて河原であり、月夜見宮の鎮座地を西河原と称した由縁が理解できます。また月夜見宮の所在は外宮本宮南面に位置する前山に対する宮後だと清在は明言し、神名秘書の注記を典拠として、月夜見宮の東に高河原神社が再建されたことも示唆しています。なお守良も高河原神社の旧地は西河原敷世古、と清在に賛同しています。

これに対し御巫清直は否定的で、『二宮管社沿革考』において

唯神名秘書ノ注ニ月讀ノ東ニアリトアルヲノミ拠トシテ、本社ノ旧地ナラムカト疑ヒ、元禄中其臆斷ヲ主張シテ、遂ニハ高河原ノ旧地ト決定シ、其後ハ高河原ノ山神ナト称スルニ至レリ。然レトモ道饗ヲ行フ地ハ何處ニテモ千歳ノ旧地ノ所在タル事ナシ。山神ヲ以テ本社ノ旧蹤トセム事ハ信從シカタシ。依テ按スルニ、応永頭工日記ニ云ク、応永廿六年正月四日ノ炎上ノ事、月夜見宮、同キ小殿、河原社、忌火屋殿焼、ト云ヘリ。此河原社ト称スルモノ恐ラクハ当社ナラムカ。然ラハ既ニ応永ノ頃月讀宮ノ域内ニ在リテ、共ニ類焼アリケルナルヘシ。寛文中ニ月讀宮ノ域内再興セルハ、古実ニ符ヘリトヤ云ハム。又竊ニ按スルニ、高河原社月讀宮ノ東ニ在リトイフハ、神名秘書ニ注スル所ナリ。社記ニハ唯山田村ニ在リト注スルノミ。神名秘書ヲ撰セシ弘安ノ頃正シク月讀宮ノ東ニ所在ナリシヤ疑フヘシ。地勢ヲ付度シテ考ルニ、宮川ノ支流、月讀宮々域ノ北ヲ西ヨリ東ニ通シテ流ル、故ニ、西ハ高ク東ハ低シ。サテ月讀宮ヲ秘書ニ大河原ニ坐ストアリ。其大河原ヨリ高キ河原ニ当社

ノ在ヲ以テ、高河原ノ号ヲ負ヒタルナレハ、月讀宮ヨリ東ニ在テハ名実ニ符ハス。然ルニ今モ月讀宮ノ西ナル一之木町ニ大社ト唱フル産神社アリテ、地勢古色アリ。

と詳述し、神名秘書を典拠に高河原神社の所在を月夜見宮の東に考証したことに疑問を呈しています。清直は宮川の支流が月夜見宮宮域の北を西より東に流れている故に西は高く東は低いと指摘し、秘書に月夜見宮の鎮座地を「大河原ニ坐ス」とある、その大河原よりも高い河原に高河原神社が所在しなければ名実に合わないと考察し、月夜見宮より西にある一之木町の産土社をもとの比定地に挙げています。現在の月夜見宮の北辺にみられる壕は江戸期に山田奉行により修築された堤とはいえ、一部宮川支流の名残を留めており、大河原・西河原などと称した当地がかつて宮川の河原であったことを想起させます。清直の指摘が正しければ、行忠の勘違いによる失考がそのまま古記録となつて、寛文年間に大宮司河辺精長等が検証して現在地に高河原神社が建てられたということになります。神名秘書の記述の正誤の判断は頗る困難ではありますが、管見によれば、「高河原」という地名は清直の考証通り、月夜見宮よりも高い西に位置する一之木町に求められると考えます。ただ月夜見宮も高河原神社もその所在が宮川の支流と関係が深かったことに何ら変わりはありません。

(おとわ さとる・神宮司庁広報室広報課係長)

※本編は平成二十六年十月～同二十七年三月にかけて斎行された第六十二回神宮式年遷宮・皇大神宮別宮月讀宮以下十二所別宮の遷御の儀において、奉拝者に対し待ち時間を利用して別宮の歴史について、遷宮の沿革を中心に解説した内容をもとに、典拠史料を明示しながら纏めた拙論であります。既に一部の別宮遷宮の歴史に関しては、神宮の機関誌『瑞垣』第二三〇号～二三二号で紹介していますが、それらをさらに増補改訂して、また書き下ろしの論考も加えて完成させた原稿であることを申し添えます。

# On the History of Detached Shrines in the Ritual for the Regular Moving of the Deities

Otowa Satoru

A *betsugū* is an detached shrine (*jinja*) for one of the main sanctuaries at Ise-Jingū. It is considered as an important *jinja* next to the main sanctuary.

Only some *jinja* were permitted to have the title of *betsugū*, which was granted through official documents issued by the emperor in ancient times, or official documents issued by the government at that time.

According to an old history book of *Jingū* called the *Record of miscellaneous matters at Ise Shrine*, there was a description of rituals for the *betsugū sengū* (regular moving of the deities at detached shrines) in 747; therefore, we recognize the fact that the ritual for the regular moving of the deities was already institutionalized in the Nara Period.

Judging from the scale of the palace and the rank of *jinja*, the *betsugū sengū* was conducted at Aramatsuri-no-miya and Taka-no-miy detached shrines. Besides these two *jinja*, it is thought that *betstugū sengū* was conducted at detached shrines such as *Takahara-no-miya* and *Izawa-no-miya*, which are far from the main sanctuary of *Amaterasu-omikami*, by recognizing the descriptions and the records in the three old history books of *Jingū*: *Record of miscellaneous matters at Ise Shrine*, *Ceremonial procedures of Ise Shrine in the Engi Era*, and the *Record of the life of Princess Yamato*.

*Tsukiyomi-no-miya* was permitted to have the title of *betsugū* in the Nara Period, and *Izanagi-no-miya* was permitted to have it in 867.

According to the description and the record of “*Ceremonial procedures of Ise Shrine in the Engi Era*”, there were six *betsugū* (*Aramatsuri-no-miya*, *Izanagi-no-miya*, *Tsukiyomi-no-miya*, *Takahara-no-miya*, *Takahara-narabi-no-miya*, and *Izawa-no-miya*) that belonged to the Inner Shrine, on the other hand, there was only one *betsugū* (*Taka-no-miya*) that belonged to the Outer Shrine.

After that, *Tsuchi-no-miya* was permitted to have the title of *betsugū* in 1128, the other *Tsukiyomi-no-miya* that belongs to the Outer Shrine was permitted to have it in 1210, and *Kazahinomi-no-miya* and *Kaze-no-miya* were permitted to have it in 1293.

In this brief history of the *sengū* (ritual for the regular moving of the deities at *Jingū*), this article describes the historical transitions involving *betsugū sengū*.